

決闘

井人
青鳥

ラフマンは、注文したハンバーグステーキに添えられていた、丸い人参のソテーを、さっきから何度もフォークでひっくり返している。波打つようなギザギザの切れ目が入った方を表だとすると、裏面ののっぺりとした平面には、ハンバーグの油がべったりとくっついて、テカテカと光っている。とてもそれを口に運ぶ気にはなれない。テカテカ、クルクルと鉄板の上で何度も回る人参を見ているうちに、幼い日の記憶が紐解かれていく。パキスタンの村で、大人たちが栽培していた、芥子の花。人参の色と形が、思い出したその芥子の花に、よく似ていた。

池袋。午後一一時。

『ジョナサン』にはラフマンたちの他に数人の客しかいない。これから深夜にかけて、長時間居座り続けるために、彼らは皆、仕切りのないソファ一席に、空気の壁のようなものをこしらえている。自分達だけの空間をそこに作って、少しでも居座りやすくしている。

昼間は、店の慌ただしさでまるで聞こえない、安っぽいオーケストラのBGMが、その空気の壁に頼りなく跳ね返りながら、店の中で浮遊している。客たちは、その空間を手に入れるために例外なく、午後十時以降に、10%割増しの料金を払う。

大学生らしき男が一人と、若いカップルがちらほら。その中の一組のカップルが、さっきからラフマンたちの席を見ては、こそこそと何か囁き合っている。恐らく日本人の早苗とラフマンが、同じ席で向かい合っているのが物珍しいのだろう。今ではれっきとした日本人なのだが、ラフマンは、数年前まではパキスタン人だった。苦勞の末、やっと日本国籍を手に入れた。

しかしそんなことを、そのカップルが知るはずもない。だからといって、彼らの目の前まで行き、空気の壁を破り、「やあ、こんばんは。僕、こう見えても日本人なんです。勘違いのないように」と説明する必要もない。当然と言えば当然だ。それに、そんな視線にも、ラフマンは慣れっこだった。「時間、まだ大丈夫？ 夜勤っていても、まだ暑いから気をつけてね。水筒は忘れてないわね？ まったく会社もヒドいわ。いきなり日勤の後に、夜勤で入れなんて。せめて事前に知らせてくれなにかしらねえ。」

「大丈夫だよ。こうやって仕事があるってことは、幸せなことだ。それに夜勤の後はよく眠れるから好きなんだ。昼夜が逆転してすまない。って社長は言ってたけど、僕はなんだか平気なんだ。幸い体力には、まだ自信がある。こういうの、なんて言うんだっけ？ ええと、『昔取ったキネツカ』だっけ？」

日本に来て、もう十六年になる。今では流暢に日本語を話せたし、そうやってことわざまで持ち出せる。体力に自信があるのは、パキスタンにいた頃、ライトミドル級のボクサーだったからだ。将来も有望視されていた。しかし、度重なる紛争が続くうち、ボクシングを続ける環境は、どんどんなくなっていく。世界タイトルなど夢のまた夢で、国全体が戦争へ向かって突っ走っていた。

日本に亡命してきた時、ラフマンはこれから自分がどうなるのかなんて、何一つ分からなかった。自分は一度死んだのだという考えを、消すことができなかつたし、それが消えないことを、望んでいるような自分も、確かに存在していた。ひよんなことから、今の会社での仕事を得た時も、ラフマンは、ろくにその内容も聞かなかつた。

要町にある『有限会社飯田商店』は、主に会社のオフィスの移転業務を請け負っている会社だった。ビルから運び出した、デスクやらパソコンやらを、同じビルの違うフロアに運ぶこともあれば、丸の内から運び出した荷物を、千葉の奥地まで運ぶこともあった。ビル自体が改装する時は、昼間の時間帯で作業を行ったが、直前まで業務を続けるような会社の移転は、夜間に作業をしなければならなかった。しかも、次の日には通常業務が行える状態に、夜中のうちに戻さなければならない。移転する距離にもよるが、夜間の作業は過酷を極めた。日勤を終えた後に、夜勤に入るラフマンの身を、早苗が心配するのも無理はない。

「ラフマン、困ったことがあったら何でも言え、金以外はなんとかしてやるから。なんてな。わはは！」

飯田商店の社長、飯田は、ラフマンのことを、いつも何かと気にかけてくれていた。ラフマンが昔ボクサーだったことを知ると、自分も昔、プロを目指してたんだぜ。と言って、ラフマンの知らないボクサーの名前を口にしたりした。そして、そいつらと同じジムだったのだと、今でもよく自慢話をする。

見た目は豪傑で、山男のようだったが、飯田は繊細で、人に気配りを欠かさない。ラフマンの日本語が、まだおぼつかない頃にも、積極的にコミュニケーションを取ってくれたし、飯を御馳走してくれることもしばしばだった。

早苗は飯田商店で事務員として働いていて、飯田が時折、その席に彼女を誘い出した。初めは何も話さなかった早苗だったが、機会を重ねるうちに、少しずつラフマンとも話をするようになった。やがて早苗とラフマンが結婚することになり、それを機にラフマンは日本国籍を取った。これまでアルバイトという立場だったが、正式に飯田商店の社員になった。新しい名前も手に入れた。

結婚を報告した時、飯田は手を叩いて、我がことのように喜んだ。式を挙げる金などなかった二人のために、会社の事務所でささやかなパーティーを開いてくれた。従業員だけの小さなパーティーだったが、ラフマンは涙が出るくらい嬉しかった。

社員になったとはいえ、ラフマンの稼ぎだけでは暮らしていけない。早苗は事務員として会社に残った。今でもラフマンは、飯田に強い恩義を感じている。だからいくら仕事がキツくても、我慢できる。

夜勤の時間まで、仕事を終えた早苗と落ち合って、遅い夕食を食べるのは、決まってこの『ジョナサン』だ。池袋の外れの、家までの帰り道にあるこの店でこうやって食事をするのが、いつからか、二人の習慣になっている。

その日もいつもと変わらない食事のはずだった。しかしラフマンは、ハンバーグに添えられていた、丸い人参を見てから、ずっと昔のことを考えている。軍の資金源のために密輸される芥子を、村の奥に密かに作られた、広大な畑で栽培していたこと。村中の大人達が、銃を持った男たちに、奴隷のように働かされていたこと。逃げ出す者や逆らう者は、虫ケラのように殺されていったこと。強い者だけが生き残る。そう信じて軍に志願したこと。そこで出会ったボクシングに魅せられ、のめり込んでいったこと。

あの試合の前日に空爆があって、とうとうあいつと決着をつけることができなかった。あの男のことを、ラフマンは思い出している。アブドゥル・ミゲルのことを。

リングから降りたミゲルの目の前に、興奮した観衆が集まってくる。客の大半は軍人だったが、中にはチャパンに身を包んだ金持ちや、パキスタン経由でお忍びでやってきた石油王なども混じっている。大声でミゲルの勝利を讃える声と、アラーに祈りを捧げる声とが入り混じって、そこは異様な熱気に包まれている。

4ラウンドKO勝ち。ミゲルはその声に応えるように右手を高々と挙げる。最後の試合を務めたミゲルの相手は、一回級上の何とかというタジク人だった。名前なんて覚えちゃいない。ミゲルのジャブは面白いように相手の顔面をとらえ、そいつが弱った頃に、左フックをボディーに二発叩き込んだ。体がくの字になったところで、返しの右アッパーをお見舞いして完全に意識を断った。ミゲルの必勝パターンだ。

アフガニスタンとパキスタンとの国境にほど近いその街で、週に一度リングが組まれていた。リングと言っても、木の棒に藁の紐を巻いただけの、お粗末なものだったが、賭けが行われるその興行には、毎週各地から多くの人が集まってきた。誰もが不安を抱えていて、それを発散できる場を求めていた。ソ連軍による、アフガン介入直前のこの年、街にはミゲルの所属するアフガニスタン軍だけでなく、国境を越えてやってきた、パキスタン軍の人間も数多く混じっていた。リングの中も、国と国とも、その時、国境などは存在していなかった。

ミゲルの周りに集まってきたのは、ほとんど全員が、ミゲルの勝利に賭け、金を手に入れた奴らだった。ルールは国際試合そのままに行われたが、階級は関係なく、一日に何試合も戦う日もあった。過酷な試合をこなす中で、ミゲルは負け無しのチャンピオンだった。「砂漠の虎」と呼ばれ、アフガニスタンの国内においては、最強とまで言われていた。

しかし、ミゲルの戦歴のなかで、二回だけ引き分けた試合がある。そのどちらも、相手はパキスタン軍にいた、ラフマンだった。「荒野の黒豹」と呼ばれていたラフマンとの二試合は、最終ラウンドを終えても決着をつけることができなかった。初めて戦った試合は、自分の負けだったと、ミゲルは思っている。足を武器にするラフマンのスピードは、最後まで衰えることを知らず、ミゲルはその華麗なボクシングに翻弄され、ほとんど決定打を打ち込むことができなかった。

ジャッジがいなかったので、試合には判定がない。倒すか倒されるかだ。最後まで決着がつかない時は「引き分け」とされた。次に戦った時も、ミゲルは善戦こそしたが、決着はつかなかった。二人の力は、恐ろしいくらい均衡していた。

駆け寄ってきた群衆から少し離れたところに、ラフマンが一人で立っている。その日ラフマンの試合はなかった。ミゲルはラフマンに気がつくや、頷いて合図を送った。ラフマンもそれに応える。群衆が散らばっていった後、二人はリングから少し離れた場所に並んで座った。ミゲルの試合に興奮冷めやらぬ観客たちは、試合が終わっても、なかなか帰ろうとしない。

「来てたのか、ラフマン。お前だったら今日のタジク人、何ラウンドで転ばす？」

「どうだろな？ まあ、4ラウンドはかからないことは確かだな。誰かさんみたいには手こずらない。」

いつからか二人は、お互いの力を認め合う友人になっていた。

「よく言うぜ。お前のスピードなら捕まりゃしないだろうが、逃げるばっかりじゃ、相手は倒れないんだぜ。」

「心配すんな。お前と次やる時は、蝶のように舞い、蜂のように刺すぜ。」

「なんだそりゃ？」

「知らねえのかよ。モハメドアリさ。アメリカで成功したチャンピオンさ。」

「モハメドなのにアメリカ人なのか？」

「アフリカンの血らしいぜ。」

「ほんとかよ？ 俺たちもいつかそれくらい有名になれるかな？ 強けりゃ誰もががついてくる。負ければ全てを失う。ラフマン、いつか一緒に、アメリカに行こうぜ。二人で世界を目指すんだ。」

「いいね。いつかお前の国と俺の国は、一つになるだろう。軍もあまり必要なくなる。平和な国に、軍隊はいらないからな。そうなったら除隊して、アメリカでもどこでも行けばいい。」

「その前に、お前との決着はつけておかなきゃな。階級制になったら戦えないしな。近々試合はできそうか？」

「そうだな。クリスマスにはできるだろ。」

「きっとだせ。ぶちのめしてやるぜ。」

「ぶちのめされるのはお前だよ、ミゲル。」

そう言って二人は笑い合った。ミゲルはまだ試合の興奮が冷めやらないのか、立ち上がってシャドーを始めた。ラフマンにもその気持ちがよく分かる。二人とも、ボクシングに取り憑かれていたのだ。ボクシングだけが世界の全てだった。

「そういや、今日は彼女は来てないのか？ お前の自慢の女。」

「ナディーは今日は来れなかったんだ。それに、あんまり殴り合いも好きじゃないらしい。どうしてだろうな。どうして女には、この素晴らしさが分かんないんだろうな。」

「俺に訊くんじゃねえよ。所詮、女には縁がないみたいなんでね。羨ましいよ。お前が。虎にはもったいない位の女だよ。彼女は。」

「ああ、正直俺もそう思うぜ。いささか良すぎるのが問題でね。」

「言ってるよ。まったく。」

客が散らばり始め、リングも撤収されようとしている。別れ際にミゲルが、ラフマンを呼び止めて言った。

「おい、ラフマン、さっきお前、クリスマスって言ったよな？」

「ああ、言ったぜ。」

「アラーは、偉大なり。クリスマスなんて関係ないだろうが。この異端者め！」

ふざけてミゲルが、右フックを入れる真似をする。

「例えだよ、例え。でもほら、アメリカに行くんだろ？ それだったらまんざら関係なくもない。」
ミゲルもふざけてそれをよける真似をする。二人は、もう一度笑い合って別れた。

その年のクリスマス。ミゲルとラフマンは、決着をつけることはできなかった。

ソ連軍のアフガン侵攻。パキスタンはアメリカ軍の影の支援を受けながら、ソ連軍と対立した。二

人の試合の前日、ソ連軍はありとあらゆる街を爆撃し、そのほとんどは壊滅状態になった。二度とそこにリングが組まれることも、観客が集まることもなかった。

アフガニスタン軍も、パキスタン軍も、忍び寄る大国の介入に怯えながら、それから長い戦闘の時代に突入した。二人は運命に翻弄され、二度と会うこともなかった。

ミゲルが今どこにいるのか、生きているのか、死んでいるのかさえ、ラフマンは知らない。ましてラフマンが、日本という国に流れ着いて、日本人になったということなど、ミゲルが知っているはずもない。

夜勤の仕事に入るのは初めてではないが、その夜の仕事は、いつにも増してハードだった。池袋のビルの三十一階から降ろした荷物を、芝浦の新しいビルまで運ぶという内容だったが、搬出用のエレベーターが一機しか使えず、池袋を出発した時には、もう東の空が白み始めていた。

首都高速湾岸線に乗ってからずっと、芝浦でラフマンたちを待っている、電気工事の連中からの電話が、ひっきりなしに鳴っていた。彼らは、配置されたパソコンの接続作業をするために呼ばれているので、ラフマンたちの荷が届かなければ仕事にならないのだ。これまでも何度か荷物を運ぶのが遅れ、その度に謝っても、あからさまに嫌な顔をするそ彼らのことを、ラフマンはあまり好きではなかった。

「すみませんねー。いや、もう少しで高速を降りますから。はい、いや、本当に申し訳ありません。そんなことおっしゃらずに。超特急で向かいますから」

助手席に乗った平山が、業者からの催促の電話に何度も謝罪して、ご機嫌をとっている。電話越しに相手にお辞儀をする日本人の習慣が、ラフマンは未だに不思議でならない。携帯越しの相手にジェスチャーをする人々の姿が、とても奇妙で滑稽に見える。

「マズイっすね。ラフさん。こりゃあ着いたら速攻始めないと、何言われっか分かったもんじゃない。しかしあいつら俺たちがどんなに遅れても、ぜってー一手伝わらないんだよなー。まったく何様のつもりだよ。」

運転手の本田が、平山の電話に話し声が入らないように、小さな声でラフマンにそう囁いた。真ん中に挟まれたラフマンは、苦笑いで水筒に入った水を一口飲むと、ほとんど車の走っていない高速道路の標識に目を向ける。「湾岸線」「銀座」「目黒方面」「渋谷300メートル先分岐」今では何の苦もなく、漢字で書かれた標識を読むことができるし、街と街の位置関係も、だいたい分かる。しかし働き初めの頃は、車に乗せられて、あちらこちらを飛び回っていると、いったい自分がこの国のどこにいるのかが分からなくなり、無性に不安になったりしたものだ。

平山は、ラフマンが会社に入る前からずっと働いているベテランで、歳もラフマンよりだいぶ上だった。仕事での顔も広く、信頼も厚い。普段はあまり喋らない、無口なイメージだったが、客の前では「調子のいいおじさん」というキャラクターを演じきっていた。それは、平山が必要に駆られて手に入れた処世術であるのは、ラフマンにもなんとなく理解できたが、そういう生き方は多分、疲れるだろうなと、いつもラフマンは思っている。平山は、ラフマンに対してどちらかという好意的に接してくれていたし、仕事の先輩として世話になってはいるが、ふとした瞬間、急に黙り込んだりする彼を見ていると、どちらが本当の平山なのかを、分かり兼ねるところがあるのは確かだった。

それとは対比的に、本田は底抜けに明るく、少年がそのまま大人になったような男だった。大人のような少年と言った方がいいだろうか。実際、年齢の若さもその理由ではあっただろうが、本質的に本田は物事を深く考えず、ポジティブに進むことができる男だった。

ラフマンが社員になったすぐ後に、アルバイトとして会社に入ってきた本田は、仕事が終わると自分が組んでいるバンドの練習に向かう毎日で、「いつか音楽の世界で売れて、この世界とはおさらばっすよ」といつも口癖のように言っていた。一緒に働き始めてすぐに、ラフマンのことを「ラフさん、ラフさん」と呼び、パキスタンがどんな国なのか、何を食べてるのか、女は綺麗なのか、というよ

うなことを、どんどん訊いてきた。

普通なら、デリカシーのないと思われるようなことでも、本田の手にかかると、不思議とその嫌味は感じられず、相手に不快な印象を与えることもなかった。それはとても得難い才能だ。その才能が、音楽でも発揮されることを、ラフマンは切に願っている。

何度か本田に、バンドを見にきてくれと言われていたが、まだ彼の演奏を聞いたことはない。歌を歌うらしいが、日本語の歌というのは、どうも難しいので、なかなか足を運べない。いつのことだったかラフマンは、車の中に置きっぱなしにしてあった、本田の楽譜を見たことがある。

「Like birds fly」

そうタイトルがつけられていた。それを見て以来、いつか必ず本田の歌を聞きに行こうと、ラフマンは心に決めている。

「だめだ。あちらさんカンカンだよ。とりあえず、パソコン系の物を片っ端から上げていくしかない。まったくやりにくいなあ。」

平山が電話を切ると、少し声のトーンを落としてそう言った。

「大丈夫っすよ、平山さん。あいつらのことなんて気にしないでやりましょうよ。こっちだってわざと遅れてる訳じゃないんですから。それにあいつらが文句言うのは、よおく考えたら筋違いですよ。」

「そうは言ってもな、なかなかそうはいかないのが世の中なんだよ。バランスが肝心だ。おい、その先左な。芝浦まで一五分で行くだろ。この時間帯なら」

「バランスですかー。俺にはよく分からないなー。ラフさんは分かります？ パキスタンでもそういう、なんて言うんだろ、義理とか世間体とかいう感覚って、みんな持ってんすか？ 俺は日本人だけだと思うなー。」

「おい、おしゃべりはそこまでのな。搬入先の割り振りを確認しとくぞ。本田、お前はエレベーター前で荷捌きだ。俺とラフマンで、フロアの部屋ごとに手分けして運んでいくぞ。守衛室の前にエレベーターがあって...」

平山の説明を聞きながら、ラフマンは、本田の口にした言葉について考えている。今までそんなことを、意識したことなんてなかった。意識する暇もなかった。ボクシングが全てだった。それ以外のことには目も向けなかったし、周りに目を向けた時にはもう、全てが崩壊していて、消え去っていた。イスラムの教えが、あらゆる形にねじ曲げられ、国中にあらゆる正義が点在していた。

もちろん、ラフマンもイスラム教徒だったが、亡命する頃にはもう、とっくに信仰心を捨ててしまっていた。今では、メッカの方角を向いて跪くこともなければ、ラマダンに入ることもない。祈りの時間にはワイドショーを見て、ファミレスでハンバーグを食べるのだ。それでいいのか悪いのかは、ラフマンには分からない。分からないが、それが自分の「現実」なのだ。失った時間は、もう戻らない。

「じゃあ、いっちょやりますかー、ラフさん。あと一踏ん張りですから。やっつけちゃいましょうよ！」

本田がそう言いながら、ウインカーを左に出す。芝浦出口。この出口で降りるのも初めてじゃない

。 ラフマンはもう一度水筒の水を飲む。どうせそれも、一瞬で汗になって消えてしまう。やがてその汗と一緒に、過去もすべて消えていってしまうのかな。ラフマンは、ふとそう考えた。

初めて二人だけでデートをしたのは、浅草の『花屋敷』だった。どうしてそこに行こうと決めたのかは、思い出せない。普段暮らしている、池袋界隈を離れたいと早苗が言ったような気もするし、浅草には行ったことがないと言ったラフマンの意見を聞いて、そうしたような気もする。二人は休みを合わせて、地下鉄を乗り継ぎ浅草に向かった。都営線の電車は車両が狭く、車内は混み合っていた。

思えば早苗も、ほとんどこの街には来たことがない。ラフマンが珍しそうに下町の商店街を眺めて歩くのと同じように、早苗もまるで異国の街に来たような感覚で、街を歩いていた。浅草寺を經由して花やしきの前に着くまで、二人はほとんど会話らしい会話はせずに、駅で一つずつもらった、浅草の地図を眺めてばかりいる。周囲から見ても、日本人の早苗と、中東系のラフマンが並んで歩く姿は、珍しく見えたに違いない。すれ違う観光客が、時折振り返って、早苗たちを見ているのが分かった。

日曜日だということもあって、花屋敷は混んでいた。入場するのにも、ずらりと行列ができていて、乗り物に乗るにも、だいぶ待たないといけなかった。二人は少しどこかで時間を潰して、行列が収まるを待とうということになり、場外馬券場が見下ろせる場所にある、小さな喫茶店に入った。

「なんだかすごい人ね。日曜日だってことを考えてなかったわ。どこか違う場所にすればよかったかも。ごめんなさい。」

「謝らなくてもいいですよ。僕、こういう機会がないと出かけないし、この街はとても活気があって、お店を見ているだけでも面白いです。連れて来てくれてありがとう。」

「そう。よかった。」

早苗はそう言ってまた黙ってしまう。飯田に紹介されて、少しづつ話をするようになったとはいえ、ラフマンと何を話していいのかわからない。早苗にはまだよく分からない。

それは、ラフマンが日本人でないことも関係しているのだろうか？ そうだ。関係は、ある。パキスタンという国が、どういう国なのかを、早苗は全くと言っていい程知らなかったし、もちろん行ったこともない。それどころか、早苗は日本を出たことすらないのだ。そんな早苗にパキスタンの国を想像することなど、出来るはずもない。ラフマンが見てきた物と、早苗が見てきた物との接点というものが、全く見つからない。

社長にけしかけられてデートに来てみたものの、どうしたものかと、早苗は思いを巡らせている。そんな早苗を見越したのか、ラフマンが口を開いた。

「早苗さん。僕の国が、どんなところかなんて、想像もできないでしょう？ 信じられないと思うでしょうが、僕もあまりよく覚えていないのです。おかしな話です。確かに生まれて育った国なのに、どんな国だったかを説明しようとする、言葉にできないんです。父も母も早くに死んでしまって、兄弟もいない。親戚の家に預けられてからは、友達もあまりできなかった。ボクシングを始めて、親しい仲間はできましたが、今はバラバラになってしまって、行方も分からない。僕の国での思い出は、そのボクシングしかないんです。いろんなことがあったはずなのに。おかしな話ですよ。」

早苗は、急に話し始めたラフマンの日本語が、とても上手いことに感心してしまった。言葉の選び方も丁寧だった。そして「父と母と早くに死に別れて」という言葉に、思わず反応してしまう。

早苗は孤児だった。父と母が若い頃離婚し、父はすぐに、病気で死んでしまった。母は若い早苗を、お荷物のように疎ましく思っていて、育児そのものを放棄した。見兼ねた親戚のおばさんが、早苗を引き取ったが、早苗はそのおばさんの子供と、どうしてもそりが合わず、結局施設に預けられることになった。その頃にはもう早苗は、身内のごたごたに巻き込まれることにうんざりしていて、施設に入って一人になることは、むしろその時望んでいたことだった。

これまで早苗は、孤児であることを弱みに感じるような生き方はしてこなかったが、自分から人にそれを話すようなこともなかった。しかしラフマンが包み隠さず自分のことを話してくれたのを聞いて、早苗も無性に自分のことを、ラフマンに話したくなった。

「ラフマンさん」

「呼び捨てでいいですよ。」

「え、ああ、じゃあ、ラフマン。私もよく若い頃のことを覚えていないの。でもほんとは見ないようにしているだけだと思う。蓋をしている限りは、悲しくなったりはしない。でも完全には蓋ができないように出来ているみたいで、時折無性に寂しくなることがある。そんな時私は、昔からずっと使っているシーツにくるまって眠るの。その匂いを嗅ぎながらね。そうするといつの間にか寂しさは消える。この大好きな匂いだけを覚えていればいいって言い聞かせるの。自分に。だから、今言ったあなたの言葉の意味はよくわかる。」

「そうですか、パキスタンか日本かなんて、あまり関係ないのかもしれませんが。世界共通なんです。そういう喪失意識ってやつは。」

早苗は思わず笑ってしまった。

「そんな言葉まで知ってるの？ 『喪失意識』変な人ね。使う機会なんて、そうないでしょうに。」

「昔からそうなんです。余計な言葉ばかりを覚えてしまう。確かに、使う機会は少ないですね。」

そう言ってラフマンも笑った。窓から外を見ると、馬券場にいつのまにか人だかりができて始める。最終レースのオッズが出た頃なのだろう。そろそろ花屋敷の人混みも、落ち着いたかもしれない。ラフマンは汗をかいて、水滴が流れ落ちているアイスコーヒーのグラスを紙ナプキンで拭きながら、「そろそろ行ってみますか？」と早苗に言った。

「そうね、そろそろいい時間帯かも。ねえ、ラフマン。一つお願いがあるんだけど。いいかしら？」

「何ですか？」

「私だけあなたを呼び捨てにするのは、対等じゃないと思うの。だからこの店を出たら、私のことも『早苗』って呼んで。敬語はなしよ。いいかしら？」

早苗がそう言うと、ラフマンはニッコリと笑って頷いた。

「オッケー。わかりました。この店を出たらそうしましょう。」

支払いを済ませて、店の狭い階段を降りると、ちょうど最終レースが出走したところだった。人々は食い入るようにレースを映したスクリーンを眺めている。

先に店を出たラフマンが、階段の最後の二段をジャンプして地面に降りると、早苗を見上げて言った。

「早苗、道がよく分からないんだ。悪いんだけど案内してくれない？」

早苗は微笑んで、「ついて来て」とラフマンの手を取った。

「大佐殿、それは命令でありますか？」

ミゲルは踵を合わせたままの姿勢を崩さずに、思い切ってそう口に出した。目の前の大きなデスクに、どっかりと腰を降ろしている男が、ギロリとミゲルを睨んだ。口髭をたくわえた初老のその男は、ゆっくりと腰を上げると、デスクの上に置かれた地球儀を、指でクルクルと回した。

「私の言葉が聞こえなかったか？ アブドゥル・ミゲル。ボクシングで頭の回路がイカれてしまったか？ 私は命令など出してはいない。これは神が命じた使命なのだ。分かるかね？」

男はそう言うと、ミゲルの正面に立ち、デスクの上に腰掛けた。

三日前に、司令部からの召喚状がミゲルの元に届いた。その頃ミゲルは、介入してきたソ連軍の指示で、市街に潜む反政府軍の分子たちを捕えては、ソ連軍に引き渡していた。表向きは、アフガニスタン軍を支援するという形だったが、実際は全ての実権を、ソ連軍が握っていた。ミゲルが呼び出された司令部でも、ロシア語が飛び交い、ロシア人の将校たちが建物をすっかり占拠していた。ミゲルが大佐と呼んだ、ハミード・ラシールも侵攻によって、実質的な地位は剥奪されてはいたが、侵攻ではないというソ連軍の言い訳のために、お飾りの形で司令部に残されていた。

「ミゲル、お前のことは聞いている。お前は強い男だ。神によって選ばれた男だ。神の子には、果たさなければならない義務がある。それを避けて生き続けることは、できないのだ。この国の現状を見ろ。あんな奴らにこの国の統治を、任せてはおけない。神の教えより、ウォッカの方が大事な野蛮人どもだ。今は忍耐の時だ。しかし、いつかこの国を、我々の手に取り戻さねばならんのだ。」

ラシールはそこまで言うと、ミゲルの脛を軽く蹴った。

ミゲルは不可解だった。もちろん、内政に干渉し、軍部を牛耳っているロシア人たちのことは、ミゲルも嫌悪している。ついこの間も、ソ連軍のある部隊が、反政府分子を捕え、そいつらを裸にし、街の真ん中で小便をかけて見せしめにしてから、銃殺した。その一部始終を、ミゲルは見ていた。殺されたのは、ミゲルと同じアフガン人であり、ついこの間まで、同じ街に住み、同じ店で食事をしてきた人々だった。

軍人として、国家の政策には従わなければならないが、一体この国で何が起きているのか、ミゲルにはさっぱり分からなかった。我々の手に、この国を取り戻さねばならないというのは、ミゲルにも理解できる。しかしそのために、軍を抜けて国を捨てるというのはどういう事だろう？

ラシールの命令は、軍を今すぐに離れ、秘密裏のうちに国境を越えてパキスタンに入り、軍に志願しろというものだった。

その頃のパキスタンは、ソ連軍に対抗するアメリカを受け入れ、実質上アフガニスタンとは対立する形をとっていた。仮にパキスタンがソ連軍を撃退したとしても、支配がソ連からアメリカに移るだけで、アフガニスタンには戻らない。幸運にもアメリカが寛容な国で、アフガン人の手に内政を任せたとしても、そこにはパキスタンの政府が敷かれるだろう。どちらにしても、アフガニスタンは消えてしまうのだ。同じアラブ人ならばその方がまだましと考えることもできるだろうが、ミゲルは国が消える事には我慢がならない。アフガン人としての誇りもある。

「私はアフガン人です。いくら同じアラブとはいえ、国を捨てるのには正直、抵抗があります。それに、パキスタン人としてこの国に攻め入り、ソ連軍を追い払えたとしても、私には我々の手にこの

国が戻るとは思えません。」

ミゲルがもう一度、踵を合わせたままの姿勢を崩さずにそう言うと、ラシールは低い声で「ククク」と笑った。

「驚いた。ただのボクシング馬鹿ではなかったようだな。頭の回路はしっかりしているようだ。だが、ミゲル。お前は何も考えなくてもいいのだ。パキスタンとの話はついている。お前の想像もつかないくらい先のことまで、綿密に、計画は立てられているのだよ。お前は軍人だろう？ 違うか？

軍人ならば上官に言われた言葉が、全て絶対であることくらいは分かるだろう？ お前は何も考えなくてもいいのだ。考えるのは私の仕事だ。」

ラシールはそう言うと、ミゲルの頬を軽くはたき、立ち上がると、書棚の中から何やら色々な書類の入った袋を取り出した。

「必要なものはここに揃えてある。お前はもうパキスタン人だ。言うまでもないが、これは極秘事項だ。少しでも外に漏らせば、お前は二度と軍には戻れないし、探し出して銃殺にする。分かったな。準備が整い次第、国境を超えろ。連絡は取り合わなくてもいい。必要な情報は全てお前の元に届くだろう。いいな？ 以上だ。」

ラシールはそう言うと、再び腰を降ろした。ミゲルは、しばらくそのまま動けなかったが、廊下からロシア語の会話が聞こえたのを合図にするように、姿勢を解き、ドアに向かう。部屋から出る前に、もう一度ラシールの方に向き直り、敬礼をする。

「アラーは偉大なり！」

「アラーは偉大なり」

ラシールも座ったままそう言ったが、もう何か別のことを考えているようだった。

車が街に入り、周りにもソ連軍は見えなくなった。ミゲルは大きくため息をつく。ワイパーの音がしているが、それは雨ではなく、窓にこびりついた砂埃を払う音だ。

「パキスタンか。」

しかしミゲルは、自分が負った任務のことではなく、ラフマンのことを考えている。あれ以来、あいつとは会っていないが、もしかしたら、これでもう一度会えるかもしれないな。決着だって、まだついていないんだ。いつか必ず、あいつを倒すと誓った。ミゲルはハンドルに添えた右手を軽く握ると、外の砂埃に向かって、パンチを打つ真似をした。長いことリングに立っていないと、体も怠けてきているのが分かる。

「ラフマン、待ってろよ。いつか必ずな。」

ミゲルは声に出してそう言った。

服を脱いで、上半身だけ裸になったラフマンは、鏡に写った自分の身体を眺めている。ボクシングで鍛えていた頃と比べると、だいぶ脂肪もつき、腹はたるんでいる。肉体労働をしているおかげで、実際の年齢よりは、たくましく、筋肉もついているように見えるが、昔はもっと鋼のような筋肉を纏っていた。

ラフマンは両手を拳の形に握ると、鏡に向かってファイティングポーズをとる。脚が武器だったラ

ラフマンは、左手を腰の辺りに構える「ヒットマンスタイル」を自分の型にしていた。最後にグローブを着けたのは、いつのことだろう？ もう思い出せない。何発か鏡に向かってジャブを出す。しかしすぐにラフマンは、諦めたようにポーズを解くと、そそくさと服を着る。何をやっているんだろう？

俺は。

早苗は仕事に出ている、夜勤明けのラフマンは、家に一人きりだ。普段なら、昼過ぎまで疲れ果てて眠り続けるのだが、その日はなぜか早く目が覚めてしまった。冷蔵庫を開けて、ビールを取り出し、テレビのスイッチを入れると、「笑っていいとも」が始まったばかりだった。テーブルの上に置かれたグラスには、早苗が出かける前に飲んだオレンジジュースが、半分くらい残されていて、先週出たばかりの女性誌が開いたままで置かれ、右肩が軽く折られている。ラフマンは早苗が座っていたのであろう場所に座って、ぼんやりとテレビを眺める。

戦争が始まった時のことを、ラフマンはよく思い出せない。日本に来るまでの記憶がすっぽりとなくなってしまうんだと、これまでは思っていた。しかしそんなはずはない。記憶は確かにラフマンの頭の中に眠り続けていただけで、ふとしたきっかけで不意にその姿を現した。ミゲルのことを思い出していたら、それがきっかけになり、連鎖するように、ラフマンとの記憶が色を帯びてきた。

ミゲルとの試合がなくなってすぐに、アメリカはパキスタンに近づいてきた。周囲はたちまち慌ただしくなり、街は殺伐とし始めた。ラフマンは、アフガニスタンとの戦いに派兵されることを覚悟したが、実際は違っていた。パキスタンとアメリカは、アフガニスタンの国内のムジャヒディン（反政府ゲリラ）の援助を行う形で、アフガニスタン内部で、戦争を完結させようとしていた。政治的な思惑までは、ラフマンには分からなかったが、これまでとは明らかに異なる光景が国内で見られるようになった。軍の訓練所では大勢のアラブ人が集められ、訓練を受けていた。中にはパキスタンの国内から志願して、その訓練を受ける者もいた。ラフマンが受けた命令は「自国の防衛」だったが、国内で戦闘がない以上、あまりやることはなかった。

そんな時、アメリカ軍から派遣されてきた指導官の一人と親しくなった。ジム・ゴードンという男だ。ゴードンもボクシングをしていたということもあり、基地の中でラフマンはスパーリングの相手をするようになった。ゴードンはラフマンの才能に気付き、アメリカに来ないかと申し出た。有難い話だったが、ラフマンは迷っていた。国が戦争の中にあるのに、それを無視して逃げ出すのは許されることではない。もし国を出たら、二度と戻れないだろう。亡命者となるしかない。それに、もしかしたらどこかで、ミゲルとの約束を果たせていないことが、気に懸かっていたのかもしれない。

しかし結局ラフマンは、ゴードンの申し出を受けることになった。大きな声では言えなかったが、この国にいても将来は見えないし、ジハード(聖戦)と言って、銃を突き上げて叫ぶ連中にも、正直うんざりしていた。ラフマンは、ただボクシングがしたいだけだった。

ゴードンが用意したルートは、日本を経由するものだった。日本の基地にしばらく身を隠し、ほとぼりが覚めた頃にアメリカに入る。それが彼の作戦だった。深夜、飛び立つアメリカ軍の軍用機に乗り、ラフマンは長い時間をかけて日本にたどり着いた。しかしその後、ゴードンから手紙が届いた。アメリカへの入国許可がどうしても下りないと、彼は書いていた。

「今さら君は国に帰ることは出来ない。こんなことになって、本当に申し訳ないと思うが、日本に亡命してくれ。いつか必ずアメリカで会おう。」

彼からの手紙にはそう書かれていた。それ以来、彼とは会っていないし、連絡もない。今となつては、アメリカに渡る気持ちもなくなってしまった。同時にボクシングに対する情熱も。

ラフマンは早苗が残していったオレンジジュースのグラスを手にとると、一気に飲み干した。あれから長い時間が経ったが、今は早苗もいる。日本という偶然訪れた国で、家族を持っている。自分は幸運だったし、幸せなのだ。そう思って生きてきた。しかし何故だろう？ 何故、今になってミゲルのことを思い出すのだろうか？ パキスタンを飛び立った時に感じた、あのどうしようもない不安を、なぜ今、自分は思い出しているのだろうか？

電話が鳴り、ラフマンは我に返る。グラスを置き、電話に出ると、それは飯田だった。「休みのところすまないな。実はちょっと話があってな。電話じゃなんだから、夕方会社に来れないか？ なに、あんまり時間は取らせないからさ。」

ラフマンは壁の時計に目をやる。「わかりました。四時には行けるようにします。早苗とその後、一緒に帰りますから。」
「すまない。大丈夫、そんな深刻な話じゃないんだ。すぐ終わるよ。じゃあ後でな。」

ラフマンは受話器を置くと、飯田の話を予想してみた。しかしまるで見当もつかない。諦めてもう一度椅子に座ると、早苗が読んでいた雑誌をパラパラとめくった。もちろんそこにも、飯田の話が何なのかは書かれていない。

「それではお友達を紹介してください。」

テレビの中の司会者がそう言った。
「ミゲル。アブドゥル・ミゲル。」

ラフマンは心の中でそう答えた。

国境を超える前に、ミゲルにはやらなければならないことが一つだけあった。ナディーはとても頭がいいから、下手に嘘を言っても、すぐに見抜かれてしまうに違いない。しかし、本当のことを話したところで、彼女は納得するだろうか？ ミゲルには分からない。

軍のジープにも、もう乗れなくなったので、ミゲルは歩いてナディーの家に向かっている。街中の至るところに、瓦礫の山が積み上げられていて、立ち並ぶ民間の壁には、銃弾で空いた穴が、星座のように並んでいる。つい一年前までは、活気に満ち、市場には人だかりができていたのに、今では見る影もない。ミゲルは足元に転がっていた木製の人形を手にとると、外れかけた右足を元に戻そうとしたが、うまくいかない。そのうち諦めて、ミゲルはその人形を地面に戻した。

ソ連軍のトラックが、ミゲルの横を走り抜けていった。すれ違い様に、荷台に乗った兵士たちの一人が、大声で何かをミゲルに叫ぶと、全員がゲラゲラと笑った。ミゲルはロシア語が分からないので、何を言ったのかは分からなかったが、特に知りたいとも思わなかった。

ナディーは美しい女だ。「ボクシングなんて馬鹿みたいだわ」というのが口癖だったが、ミゲルが負け無しのチャンピオンだった頃から、彼女はいつもミゲルの側にいた。いつだったかミゲルは、「ボクシングが嫌いなら、どうして俺の側にいるんだい？」と聞いてみたことがある。男というのは、時としてそういう無意味な質問をしてしまうものだ。ナディーは笑って言った。

「側にいるんじゃないわ。私とあなたは繋がっているの。分かる？ あなたが強い男で、ボクシングで名声を得ているから、好きなんじゃないのよ。例えばあなたが一文無しの乞食になったとしても、私はあなたと繋がっているの。あなたが誇りを捨てない限りね。」

ミゲルはナディーを抱き寄せて、キスをした。二人はいつも、人目を忍んで会っていた。ナディーの父親は、ボクサーだったミゲルのことを毛嫌いする、頭の固い、古風なイスラム教徒だった。もちろんナディーもミゲルも、イスラム教徒だったが、恋人を想う気持ちが、信仰を飛び越えて暴走するのは、よくあることだ。二人は愛し合っていた。

家に着いてもミゲルは、なかなかドアを叩くことができない。考えがまとまらない。それにドアを叩けば、きっと父親が出てくるに違いない。ドアの前で迷っていると、ドアの方が先に開いた。幸運なことに、出てきたのはナディーだった。

「ミゲル！ 脅かさないでよ。どうしたの？ そんなところに立って？ 昼間はダメよ。お父さんだって今家にいるし。さあ、こっちへ来て。」

「ナディー！ 誰か来たのか？ 話し声がしたが？」

家の中から父親の声がした。

「誰も来てないわ。お父さん。それじゃあ、ちょっと出かけてくるわ。あまり遅くはならないから。」

ナディーは、手招きをすると、一つ先の路地に入っていった。ミゲルもその後が続いた。「どうしたの？ 急に。話したいなら夜でもよかったのに。でも会いに来てくれて嬉しいわ。最近はず、ソ連兵が前触れもなくやってきて、あれこれ聞くもんだから、お父さんも神経質になってるのよ。」

「すまない。ナディー。実は今夜、街を出ないといけないんだ。新しい任務があってね、しばらく戻れないんだ。」

「新しい任務？ 急な話ね。今夜発たないといけないの？ どうしてもっと前に話してくれなかったの？」

「命令が出たのが三日前なんだ。だから話す暇もなかった。すまない。」

「そう。仕方ないわね。それで、いつ頃帰ってくるの？ 一週間？ 一ヶ月？」

「分からない。本当に分からないんだ。一年になるかもしれないし、三年かもしれない。」

「ミゲル、一体あなたどこに行くの？ 任務って何なのよ？」

「ナディー、それは言えないんだ。言えないけど、俺は必ず戻ってくる。戻って来たら、俺と結婚してくれないか？ 今日はそれを言いに来た。」

ナディーはとても驚いたようだった。ミゲルは不安になった。しかしナディーはすぐに、いつもの笑顔に戻って言った。

「そう、分かったわ。どこに行くのか、何をするのかは言えない。だけど信用して欲しい訳ね。いいわ。信じてあげる。あなたが帰るまで待つわ。あなたの妻になりましょう。神に感謝します。」

抱き合う二人。

「ありがとう、ナディー。俺は必ず帰ってくるからな。」

「それはもう聞いたわ、ミゲル。気をつけてね。ダイヤモンドの指輪を買って帰って来てくれてもいいのよ。女はそういうのに弱いのだ。」

「分かった。必ず買って帰るよ。偽物だったら許してくれよ。」

別れのキスを交わし、ナディーは家に戻って行った。ドアを閉める間際に、もう一度だけミゲルの方を見て、彼女は微笑んだ。

帰り際、もう一度ソ連軍のトラックがミゲルの横を通り過ぎて行ったが、さっきとは違い、その荷台に乗った兵士たちは、疲れ果てたように、黙り込んでいた。あるいは、自分の故郷のことを考えているのかと、ミゲルは思った。国を出る自分も、あの連中と同じような顔をするのかと思うと、少し気が滅入ったが、ナディーのことを思い出し、帰ってきた時のことだけを考えることにした。

その夜遅く、ミゲルは国境を越えてパキスタンに入った。ラシールが用意した書類を見せると、何なく入国することができた。思えばこの国には一度も来たことがなかった。ラフマンはいつも、美しい国だといって自慢していたっけ？ 落ち着いたらあいつを探してみよう。同じ軍にいるんだから容易いはずだ。

軍服を脱いで、民間人の格好をしたミゲルは、どこから見てもパキスタン人に見える。荷物を背中に背負い直し、ミゲルは夜明けの近い、街へ向かう一本道を、まっすぐ歩き始めた。

先にあるのは「希望」だけで、後に残してきたナディーもまた、その希望の中に含まれているんだと、ミゲルはその時、固く信じていた。

ラフマンが事務所に着いた時、ちょうど早苗が帰り支度を整えているところだった。小さな事務所の中には、デスクが五つしかない。入り口のドアを開けると、すぐ目の前に四人がけのテーブルがあって、その真ん中には、「飯田商店」とラミネートされた文字が貼り付けてある。飯田はそこを「応接室」と読んでいたが、仕切りも何もない、パイプ椅子が四つだけの空間では、応接も何もないよね。と、ラフマンと早苗は、よく言い合っていた。

「あら？ どうしたの？ 夜勤じゃないわよね？ 迎えにきてくれたの？」

「いや、社長に呼ばれたんだ。なんか話があるんだって。もう上がり？」

「うん。早めに上がっていいって。社長が。長くなりそうなの？ すぐ終わるんだったら、ここで待ってるけど？」

「ちょっと分からないな。ジョナサンで待っててよ。長引くようなら電話するからさ。」

そう言ってラフマンは事務所の奥にある、ガラスの上半分が半透明になっているドアを見た。そこにもラミネートされた文字で、「社長室」と書かれている。

「そう、分かった。じゃあ後でね。」

そう言うと早苗は、ドアを開け、事務所を出て行った。ふと早苗の席に目をやると、デスクの上にも、黒いカチューシャが置いたままにされている。早苗が忘れていった物だ。ラフマンはそれを手にとり、ポケットにしまった。

「カチューシャってアラビア語みたいな響きだけど、もともとはそっちの言葉なんじゃないの？」

いつか早苗にそう聞かれたことがあった。しかしラフマンは、そんな言葉を聞いたことがなかったし、パキスタンの女たちがそれをつけていたかどうか、よく覚えていなかった。

「おう、ラフマン。来たか。悪いな、休みなのに。こっちで話そう、入りなよ。」

いつのまにか「社長室」のドアが開き、飯田が顔を出していた。ラフマンは「はい」と言って、部屋の中に入った。

「社長室」の中には飯田の席一つだけしかない。デスクの上には、パソコンが一つ、平積みされた大量の書類（請求書のコピー、決算書、ゴルフコンペの日程表、そんなものだ）、小さいデジタルの時計、それとその時計より少し大きな地球儀が置かれている。透明なデスクマットの下には、今年十六になるという飯田の娘の写真が何枚か挟んであり、それと同じくらい大事そうに

「身体髪膚之れを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり」

と、大きく書かれた紙も挟まれていた。ラフマンにはその言葉の意味は分からなかったが、要は娘のために頑張らねば。という意味なんだろうと、なんとなく思っていた。部屋に似つかわしくない、黒のソファセットが部屋の約半分を占めていて、忙しくて家に帰れない時、飯田はよくそこに横になって眠っていた。

「まあ座ってくれ。何か飲むか？ 俺は酒を飲むけど、お前も飲むか？」

「いえ、お酒は。大丈夫です、ありがとうございます。」

「そうか、じゃあ、ちょっと失礼して。」

飯田はそう言ってラフマンを座らせると、部屋の隅にある小さな二段式の冷蔵庫から、ビールを一

つ取り出してきた。以前「応接席」で飯田がお客さんの相手をしていた時に、「早苗ちゃん、奥のバ
ーから冷たい物をお出しして。」と言われて大笑いしそうになったと早苗が話していたのを思い出
して、ラフマンは笑いそうになるのを、必死でこらえた。

「最近はどうだ？ ラフマン。早苗ちゃんとも、うまくやってるのか？ 早く子供の顔でも見せてく
れよな。子供はいいぞ。いや、本当だぞ。」

飯田はそう言って、ビールの缶を開けて旨そうに音を立てて飲んだ。

「ありがとうございます。早苗とはうまくいってます。子供は、いつかは作りたいです。でも、もう
僕も年ですし、なかなか難しいですね。」

「何を言ってんだよ、お前は。お前が年なら、俺はもう爺さんだぜ。いつまでも現役でいるぜ。って
いうくらいの心意気がないとダメだよ。ボクサーだったんなら、分かるだろう？ ハングリーさをなく
しちゃいけない。」

飯田はそう言うと、ソファの横に貼られた、来月行われるタイトルマッチのポスターを見上げた。
飯田は今でも時折、試合を見に後樂園まで足を運んでは、有望そうな選手に目を付け、時には少額で
はあるが、そのスポンサーを買って出していた。ラフマンは何度も観戦に誘われていたが、その度に理
由をつけて断り続けていた。

「さて、本題に入ろうか。実はお前に頼みがあってな。南のことは知ってるよな？ あいつんとこな
、最近経営が悪くてな。来月会社をたたむことになったそうなんだよ。従業員のことを考えて、その
前に全員を解雇するらしい。そうすりゃ、失業保険がすぐ出るからな。苦しい決断だとは思うが、ど
うしようもないことだってある。」

南工務店は、ラフマンたちが荷を運び出した後に、そのビルのフロアの解体と内装をを請け負う会
社だった。ラフマンも何度か、飯田と南という男が話しているのを見たことがある。飯田より少し
若い、痩せていて、笑う時に手を叩く癖のある男だった。

「ところが南がな、会社をたたむ前に、外国人を一人受け入れる手続きを取っててな。今になって、
今更受け入れられないとは言えなくなっちゃったらしいんだ。そこで俺んここに連絡が来た。俺のと
こで、その外国人を受け入れてくれないかって言うんだ。俺は以前も受け入れて、育て上げた実績が
ある。あ、お前のことな。入管も俺んところだったら、その実績を買ってすぐ許可が下りるだろうって
南は言うんだ。でも正直に言えば、うちにも今、もう一人従業員を増やす余裕はあまりない。仕事だ
って減ってきてるしな。だけどな一、断れなかったよ。南のためっていうのもあるんだが、俺の中
もう一人の自分がさ、ハングリーにいけ！ って言って聞かなかった。」

飯田はそこまで言うと、もう一口ビールを口に作る。

「仕事がなきゃ、自分でとってこなくちゃあな！ そうだろ？ ラフマン！」

「はい。頑張ります。」

ラフマンは南のことを、どう言っているのかが分からず、それだけ答えた。

「そこでだ。うちはその外国人を受け入れることに決めた。そいつの教育係をお前にやって欲しい
んだ。日本で慣れない生活が始まれば、いろんな不安だってあるだろう。使い物になるまで、そのケ
アも含めて、面倒をみてくれないかと思ってな。」

「教育係？ そんな。僕には無理ですよ。仕事だって、まだまだ覚ええないといけないこともあるし、

第一、その人とコミュニケーションが取れるかも分からない。国が違えば文化は全く違います。僕は社長と早苗がいたからなんとかありました。」

「だから、そいつにも同じように、手を差し伸べてやって欲しいんだよ。それにな、そいつはお前の国に近いとこの出身なんだよ。だからお前をお願いしてるんだ。えーと、どこだったかな、そう、アフガニスタン。確か隣の国だろう？ 言葉だって分かるだろう。どうだ？ 引き受けてくれないか。この通りだ。」

そう言って飯田は頭を下げた。ラフマンはしばらく何も言えずに、考え込んでいたが、これまでに飯田に受けた恩を思うと、断ることなどできなかった。

「分かりました。あまり自信はありませんが、出来るだけやってみます。」

「そうか！ ありがとよ、ラフマン。いやー、よかったよかった。俺も協力するからさ。早苗ちゃんにも話しておいたほうがいいだろうな。今日にでも話しておいてくれ。あ、早苗ちゃん待たせてるのか？ 悪い悪い。話は以上だ。ありがとよ、本当に。」

飯田は安心したのか、残りのビールを一気に飲み干した。それを見届けてからラフマンは「じゃあ失礼します」と言って席を立ち、部屋を出ようとしてから、もう一度ソファに座ったままの飯田の方に振り返った。

「あの、社長。その人、アフガニスタンのどこの生まれだって言っていました？」

「え？ そこまではちょっと聞いてなかったな。なんでだ？ 何か問題があるのか？」

「いえ、問題はないです。ただ、地域によって言葉が多少違うことがあるので。まあ、分かるとは思いますが。」

「そうか。今度南に聞いておくよ。そうそう、名前は分かるぞ。どこだっけな。ちょっと待て。」

飯田はそう言って、デスクの引き出しから何枚かの書類を取り出した。そして指で文章をなぞっていくうちに、何かを見つけたらしい。

「あったあった。これだ。ええと、ミゲル。アブドゥル・ミゲル。って名前らしい。」

ラフマンは言葉を失ってしまう。

ミゲル！ あのミゲルなのか？ まさか！

「どうした？ 知り合いなのか？ この男と。」

「いえ。違います。ただ似た名前に聞き覚えがあったので。」

「そうか。じゃあ頼んだぞ、ラフマン。なあと、そんなに難しく考えなくてもいいんだ。気楽にな。じゃあまた明日な。」

会社を出て通りに出たラフマンは、混乱している。ミゲルが日本に？ なぜだ？ いくら考えても分からない。早苗がジョナサンで待っている。しかしどうしても足が動かない。山手通りを流れていく車を目で追うのが、ラフマンには精一杯だった。

「聞きました？ ラフさん。新人の話？ 社長も思い切ったよなー。ただでさえ不景気だったのに、面倒な外人さんなんか雇っちゃって。あ、ラフさんは別っすよ。もう日本人だしね。」

本田はダンボールの梱包を解くのに手こずっている。季節外れの台風が、東京の空に漂う粉っぽい空気を根こそぎ運び去って行ったが、夏という季節そのものは、毅然としてまだ東京に留まっていた。八月の終わりの、昼下がりに。ラフマンたちは、汗だくになりながら、お台場のビルの荷物を運び出している。かなり大掛かりな仕事だったので、当然本田も平山も、メンバーに入っていたが、平山は別フロアで指揮をとっていて、ラフマンたちとは別行動だった。本田は、ようやく手こずっていた梱包をやっつけてしまうと「ちょっとひと息しましょうよ」と皆に言った。

アルバイトも含めて、二十人ほどがそのフロアで作業をしていた。そこを束ねるリーダーは、一応、ラフマンということになっていたが、若いアルバイトたちは、分からないことがあると、本田に尋ねてきた。別にラフマンは、気にしてはいなかったが、本田は気を遣って、自分で答えられるようなことも、逐一ラフマンのところに確認にきた。そういう細かな心配りができる本田なのに、バンドの方はさっぱり売れない。きっと、いい奴が書いた、いい曲が売れる訳ではないんだな。ラフマンはそう思っている。しかし、売れている売れていないは関係なく、本田の心遣いは嬉しかった。

積み上げた荷物の上に、各々が座り込み、吹き出した汗を拭き取っている。ラフマンと本田も、窓際のダンボールの上に腰を降ろし、遠くに見える、大きく円形のカーブを描いているモノレールの線路を眺めていた。

「あーあ、なんでこんなに暑いんでしょうねえ。ラフさんはやっぱり暑さには強いんですか？」

「いや、そんなことないよ。」

「そっか。でも慣れてるでしょう？ 俺は札幌の出だから。あ、札幌って分かります？ 日本の北にある、北海道っていうジャガイモが有名な、形も出来損ないのジャガイモみたいな場所の、小さな街なんですけどね。とにかく寒いんですよ。その街に生まれた人間は、生まれつき暑さに弱いんです。遺伝子に組み込まれてるんですよ。あり得るでしょう？ キリンだって木の上の草を食べるために首が長くなったんだから。」

ラフマンは北海道に行ったこともないし、キリンも見たことがない。一度、上野動物園に早苗と出かけたことがあるが、その時キリンは体調が悪かったらしく、檻から出されていなかった。

「キリン。鯨偶蹄目キリン科に属する動物。もっとも背が高い動物であり、体にくらべ際立って長い首をもつ。アフリカ中部以南のサバンナや疎林に住む」

パネルにそう書かれているのを早苗が読んでくれた。主のいないキリンのスペースは、まるで誰もいない公園のようで、コンクリートで作られた池の水が、静かな音をたてて波打っていた。ラフマンはキリンがこの公園を悠然と歩く姿を想像してみたが、なにしろキリンの大きさが分からなかった。ので、どうしてもその中に、縮尺をあてはめることが出来なかった。

「ところで、その新人っていつ入ってくるんですか？ 何か聞いてます？」

「はっきりは分からないけど、近いうちらしいよ。教育係をやれって社長に言われたよ。その人はアフガン人だからちょうどいいだろうって。」

「うわー。そりゃまた、大変な役目を引き受けちゃいましたね。社長もひでえな、人に押し付けるな

んて。アフガンって、アフガニスタンのことっすか？ それってパキスタンの近く？」

「隣の国だよ。何度か試合で行ったことがある。」

「試合？ ああ、ボクシングのね。あっちの人がボクシングをしてるっていうイメージはないんだよな。それにラフさんがボクサーだったなんて、どうしても信じられないですよ。優しいし、穏やかな性格だから。」

ラフマン自身も、自分がボクサーだったのかどうか、今ではよく分からない。「荒野の黒豹」と呼ばれていたのは、果たして現実だったのだろうか？ しかし、数日前、飯田からミゲルの名前を聞いた。現実にはミゲルは存在しているし、もう間もなくラフマンの前に現れる。その時なんて言えばいい？ かける言葉がどうしても見つからない。ミゲルはボクシングをやめてしまったのだろうか？

ボクシングだけで繋がっていた二人が、ボクシングを捨てた時、一体何を話せばいいのだろうか？ ラフマンには分からない。早苗にも、ミゲルのことはまだ話していない。教育係のことは伝えてあるが、知り合いだということは伏せてある。本田もそうだ。何とかきっかけを作って話そうとは思っているが、きっかけを掴む前に、ラフマン自身が混乱してしまっている。

「まあ、俺も協力しますから。頑張りましょうよ。そいつの名前、なんて言うんですかね？」

「ミゲル、アブドゥル・ミゲル。」

「うーん。『ミゲちゃん』はちょっと呼びにくいから、『ミゲル』でいいか。平山さんにも話しておきますから。ああ、そういや、最近平山さん元気ないんすよ。何かあったのかな？ 今度ちょっと飲みませんか？ 作戦会議も兼ねて。対ミゲルの。」

「わかった。ありがとう。」

二人はもう一度、窓の外を眺める。屋形船が何艘もお台場の湾に浮かんでいる。もう少し遅い時間になれば、赤い提灯をぶら下げた舟で、川は埋め尽くされてしまう。向こう岸に見えるビルの群れは、東京の外側を守るように壁を作っていて、その屋上には様々な種類の広告がライトアップされている。「ポンジュース」「DHC」「三菱地所」「週刊ポスト」この東京には、何の危険はありませんと、笑顔で訴えている。

「ラフさん、あれ見えます？ あそこの円形の線路？」

「え？ ああ、見えるよ。」

本田が突然、川の上を走っているモノレールの線路を指差して言った。

「あれ、ワザとあそこで電車を一周させるために作ったんですって。本当なら、ほら、あそこから一直線に繋がれば早いじゃないですか？ 時間だって節約できる。観光客に東京を全部見せるために、わざわざああいう風に作ったんです。バンドの奴が、その工事のアルバイトしてたから、教えてくれたんですけど。」

「へえ、そうなんだ。」

「でも、俺は逆だと思ってるんです。」

「逆？」

「本当は、観光客が東京を見るためじゃなくて、入ってくる奴らを、東京が品定めしていると思うんですよ。こいつは危険人物だ、こいつは金を落としていく、こいつらは何の害もない。ってね。そ

うやってこの街は、誰にも気付かれないように、いつの間にか人を、外へ外へ締め出していくんです。締め出された方は、東京に追い出されたなんて、思っちゃいけない。自分のせいだと思いながら、この街を出ていくんです。それってなんか、怖いっていうか、卑怯だと思いませんか？」

ラフマンは本田の言葉の意味がよく分からなかった。東京が人を見る。どういうことだろう？ 「ま、こうやってここにいるっていうことは、俺はまだ締め出されちゃいけない訳だし。頑張らなきゃなー。さて、そろそろやっつけちゃいますか？ もう峠は越えましたよ。あ、もう終わりは近いって意味ですよ。知ってますよね？ ラフさん変な言葉いっぱい知ってるし！ あはは！」

本田はパチンと手を打つと、アルバイトたちに「さあ、もうちょいだ！」と言って発破をかけた。ラフマンも本田の後に続き、残りのダンボールを運び出しにかかる。

東京が人を選び、人を追い出す。ラフマンは、この街に受け入れられたのだろうか？ そしてミゲルのことを、東京はどういう奴だと思ってるんだろう？ そんなの分からない。ラフマンにだって、ミゲルのことがよく分からないのだから。

軍用のジープには、ミゲルも含めて、四人の男たちが乗り込んでいる。舗装されていない道は、容赦なく車を上下に揺らしたが、皆それには慣れていたので、文句を言う者はいない。文句どころか、さっきから誰一人、口を開かない。

基地から訓練施設を往復するだけの毎日だ。ミゲルは吸いさしのタバコを外へ放り投げると、立てかけた銃に手をかけた。幌のないジープに乗せられた銃は、直射の日光を存分に浴びて、熱を持っている。

外に広がるのは、見渡す限りの芥子畑だ。銃を持った兵士が何人か見張りに立っていて、ミゲルたちの車を見ると、よくわからない言葉で何かを叫んだ。多分、タリク人なんだろう。あいつらは息が臭いから嫌いだ。一面に咲いた芥子の赤い花が、眼前に咲き乱れる様は、まるで銃で撃たれた大地が、血を流しているように見える。

もう五年経つ。ミゲルはパキスタンの軍の管轄下に置かれた「特殊部隊」に配属され、訓練を受けていた。どうして軍の組織なのに、基地から離れた、こんな郊外で訓練をするのかはミゲルには分からなかったが、ラシールの言葉を借りれば、これは極秘の任務なのだから、そういうこともあり得るのだろうと、何となく考えていた。軍に志願し、ラシールからもらった書類を差し出すと、まるで初めから決まっていたかのように、入隊できた。以来、「その日のために」という合言葉の下で、訓練を受けてきたが、「その日」は何を意味するのかは、ミゲルには分からなかった。

分からないまま、五年が過ぎてしまった。ナディーはどうしているんだろう？ 彼女は待つと言ってくれたけど、何の連絡もできないまま、もう五年も経った。手紙を書くことも禁止されていたし、あっちからの便りも、何もなし。もっとも、ミゲルのいる場所すら彼女は知らないのだから、それも当然だ。

ミゲルは母国の状況を、噂でしか聞くことができなかった。ソ連軍は相変わらず駐留を続けていたが、長い期間の戦闘にも関わらず、アフガニスタンのゲリラを壊滅できない状況に、ソ連本国では、これ以上の駐留を疑問視する声も上がっているらしかった。しかし、すべては噂でしかない。ミゲルはまだ帰ることができない。ナディー。君に会いたい。それだけだ。

散々探し回ったが、ラフマンの行方は、とうとう分からなかった。入隊してすぐに、ミゲルはラフマンの行方を探した。軍にいたはずの彼は、ある日突然姿を消し、誰もその行方を知る者はいなかった。

ゴードンというアメリカ人の指導官が、一時期、一緒にスパーリングをしていたことがあると言っていたが、彼はそれ以上、何も話そうとしなかった。「お前もボクシングやるのか？」と聞かれたが、ミゲルは「ボクシングなんて知らない」と答えた。どうしてだろう？ 何故かミゲルは嘘をついた。

この国に来れば、ラフマンとも再会し、もしかしたらボクシングがまたできるかもしれないと、ミゲルは初めは考えていた。しかし、今ではもうボクシングのことなんて、考えることもあまりない。ジープに乗った他の兵士たちと同じように、ミゲルは毎日ジハード（聖戦）のためにという言葉で叩き込まれ、それ以外のことを考えている暇もない。いや、そんなことはない。ナディー。君に会い

たい。

ジープはもうすぐ訓練所に着く。着いたらまた、同じことの繰り返しだ。いつかも分からない戦いの為に、地獄のような訓練が毎日繰り返されるのだ。精神だっておかしくなる。この五年間で何人かの兵士が脱走を企て、全員が失敗し、銃殺刑にされた。見せしめのために公開されたその処刑を、ミゲルも見ることがある。異常に興奮した男たちが、縛り付けられた脱走兵に向かって、代わる代わるツバを吐いていた。最後に何か大声で脱走兵が叫んだが、さるぐつわをされていて、聞き取れなかった。あるいは、その男もタリク人だったのかもしれない。

銃声が響いて、撃たれた男は、うつ伏せに倒れた。溢れ出した血が、土に滲みていくのが見えた。芥子の花だ。あれは芥子の花と同じ色だ。ミゲルはふとそう思った。

軍の費用のほとんどをまかなっている麻薬の金を、この芥子の花が生んでいる。この花が、よりたくさん大地を覆えば覆うほど、戦いは激しくなっていくのだ。最後にナディーと交わした会話を、ミゲルは今でもよく覚えている。

「ダイヤモンドを買ってきてくれてもいいのよ。」

そう彼女は言っていた。今、ミゲルが彼女に持ち帰れるものといえば、この芥子の花くらいだろう。血色の花。裏切り者の花。

その日の訓練を終え、宿舎に戻ったミゲルを、思わぬ客が待っていた。埃まみれになった身体を、水場で洗い流している時、後ろから肩を叩かれた。ラシールだ。

「久しぶりだな、ミゲル。生きていたか。」

ミゲルは拭いていた布を慌てて投げ出し、「気をつけ」の姿勢をとる。

「大佐。お久しぶりです。いつこちらへ？」

ラシールはそれには答えず、水場に置いてあったボロボロの椅子を見つけると、いつかミゲルが部屋の中で見たように、どっかりと深く腰を落とした。「その日」が来たんだ！とうとう国へ帰れる！

ミゲルは姿勢を崩さないまま、心の中でそう叫んでいた。

「長い時間がかかってしまった。ミゲル。お前は戦士として、これから国へ戻るのだ。そのための訓練は、十分に受けたはずだ。アフガンを我々の手に取り戻す日は、もう目の前だ。ソ連軍は神によって粛清されるだろう。」

ラシールの言葉を聞きながら、ミゲルはナディーのことしか考えていない。帰れるのだ！ 彼女に会える！ 結婚の約束を、彼女は覚えているだろうか？

「一週間後に国へ入れ。軍ではなく、新しい組織として、ソ連軍を追い出す。」

「軍には戻らないのですか？」

ミゲルは不思議に思い、そう尋ねた。

「そうだ。我々は長い時間をかけて、準備を進めてきた。そしてすでに組織は国内のゲリラを掌握しつつある。ソ連軍がいなくなった暁には、軍ではなく、我々の組織が国を統治するだろう。時は来たのだ。ミゲル。ジハードのな！」

ミゲルにはよく分からなかった。新しい組織？ ゲリラを掌握？ どういうことなのだろう。

「ミゲル。お前はただ私に従えばいいのだ。悪いようにはしない。国へ帰ればお前は英雄だ。首都を

奪回した戦士なのだからな。」

ミゲルにはそれ以上は聞けなかった。ラシールが立ち上がる。

「それじゃあ国で会おう。お前はもう立派なタリバンの兵士だ。」

「タリバン？」

「そう、それが我々の名前だ。やがてすべてを手に入れ、神の名のもとに、世界に広がっていく。」

タリバン？　それが俺の名前か。まあそれならそれでいい。ナディー！　待ってろ！

今すぐ会いに行くからな！　ミゲルはダイヤモンドの代わりに、ナディーに持ち帰れる物を、探さなくてはと思った。しかしいくら考えても、ミゲルの頭に浮かぶのは、絨毯のように大地一面に咲き乱れる、赤い芥子の花だけだった。

朝から降り続く雨のせいで、店のエアコンは、水蒸気を含んだ白い風を吐き出し続けている。早苗たちが座っている四人掛けのテーブルの表面には、うっすらと水の膜ができて、そのせいで、放っておくと四つのグラスがスルスルとテーブルの上を滑っていく。早苗は他の三人が熱心に話すのを聞きながら、時折、床に落ちないように代わりばんこに、四つのグラスを押さえていなければならなかった。

その日、早苗とラフマンは仕事が休みだった。夕方から映画でも観ようかと二人で話していた時に、本田から電話がかかってきた。

「休みのとこすいませんね。今夜ちょっと時間取れませんか？ 平山さんが元気ないって言ってたじゃないっすか？ 今夜だったら空いてるって言われたから、話を聞こうかと思って。早苗さんも休みなんすよね？ よかったらご一緒に。」

観ようかと言っていた映画も、それほど面白そうではなかったし、平山のことも気になっていた。ラフマンは「いいよ」と言って電話を切った。早苗は男同士で話した方が、平山さんも話しやすいんじゃないの？ とラフマンに言ったが、「そんなことないよ」と言って、ラフマンは笑った。「むしろ早苗がいてくれた方が、平山さんも話しやすいと思う。」

どうして男は、肝心な所でこうも鈍感なんだろう。そしてそれは世界共通みたいね。早苗はそう思ったが、口には出さなかった。

「あの一。何か飲みます？ 私おかわりに行きますけど？」

早苗は男たちの、空になったグラスを指差してそう言った。

「あ、いや、まだ大丈夫ありがとう。後で自分で取ってくるよ。」

と、平山。

「俺も大丈夫です。この水で後はもたせますから。」

と、本田。

「ありがとう早苗。僕も大丈夫。」

と、ラフマン。

早苗は一人で席を立つと、店の中央にあるドリンクバーに向かう。『ジョナサン』で会うことになったのは、本田が早苗とラフマンに気を遣って、二人の家の近くで集まることになったからだ。「店は任せますよ」と本田に言われたが、二人は『ジョナサン』以外の店をあまり知らなかった。本当なら、酒を飲むような店がよかったのかもしれないが、ガヤガヤとした店で大声で話すのも、早苗もラフマンも気が進まなかった。

かれこれ二時間近く、男たちは平山の娘のことを話している。結婚二十年を迎える平山には、十七になる娘がいた。子供は一人だけで、目に入れても痛くないほど大事に育ててきたらしい。その子が高校に入ってから突然、学校に行かなくなった。「行けなくなったんだ」と平山は言い直したが、その違いが早苗にはよく分からなかった。

学校でいじめに遭っているような様子はなく、中学では、生徒会にも入っていたような、快活な子だったらしい。それが突然、部屋に籠りっきりになり、家族と食事も取らなくなった。部屋には鍵を付け、「絶対に入らないで」という手作りの表札が、ドアノブに掛かっているのだという。「絶

対に」という部分だけが赤文字で書かれているらしい。

「一日中部屋の中で何をしてんのか、さっぱり分からないんだ。」

平山は頭を掻いた。

その子の気持ちなんて、父親である平山さんにも分からないし、ましてやラフマンや本田君に分かるはずもない。私は女だから、ちょっとだけ分かる。全部じゃない。ちょっとだけ。

早苗はドリンクバーの新しいカップに、カモミールティーを淹れると、その場で少しだけ、それを口に含んでみた。鼻に抜ける香りを確かめながら、部屋で一人ぼっちの少女のことを考えてみる。私だって一人ぼっちだった。でもそうなることを望んでいた自分も、確かに存在していた。それを周りに説明することなんて、絶対に無理だった。

誰かに相手にされたくて一人になることと、本当に一人になりたくて一人になること。それを周りが区別することは、はっきり言って不可能なのだ。早苗は自分の経験からそう考えている。その考えだって、少女にはまったく当てはまらないのかもしれない。だってそれは、早苗だけの経験であり、その少女の経験ではないのだから。

「いっそのことドアをぶち破って、部屋の外に引きずり出してきたらどうですか？ 甘やかしてばっかじゃだめですって。」

「そんなこと無理に決まってるだろう。本当は素直でいい子なんだ。これまでだって、一度も手が掛かるようなことはなかったんだよ。それが突然だぜ、突然。こっちが困っちゃうよ。」

「僕には『ひきこもり』っていう言葉自体がよく分からないんですが、要は何か言いたいことがあるけど、言えないってことですよ？ ちゃんと聞いてあげたらどうでしょうか？」

「あのなあ、ラフマン。俺はもう二ヶ月も、娘と口をきいてないんだ。ドアの外からいくら話しかけたって、なしのつぶてでさ。」

「ナシノツブテ？」

「全然返事がないってことだよ。とにかく、相談所とかにも行ってみたんだが、全然だめ。学校の勉強は遅れるばかりだし、このままだと辞めざる得ないかもしれない。なんだかなー。」

「ナシノツブテ、か。面白い言い方だな。」

「おい！ ラフマン！ お前本気で聞いてんのかよ！」

「わはは！ まあまあ。ラフさんに当たらないでくださいよ。しかし、それは困りましたねー。」

これだから男はだめなんだ。席に戻って、話の続きを聞いていた早苗は、心の中でため息をついた。人は他人に、何かをしてやれる程、余裕はないのだ。みんな手の届く範囲の中でしか生きていけない。それなのに男という生き物は、平気でその範囲を飛び越えて、人のことにまで首を突っ込みたがる。「身の丈」というものを知らないのだ。自分が大きい存在だということを、どうしても相手に知らしめたいと、いつも考えている。

早苗は、その子がとても不憫に思えてくる。そっと抱きしめて「いいのよ、自分の気の済むまでやっpegらんなさい」と言ってあげたい。あるいはそれも、余計なお世話なのかもしれない。例えそうであっても、その子に会ってみたい。

「早苗さんは？ どう思います？ さっきから何も言わないけど、女性の立場から見て何か解決策はないですかね？」

本田が話を早苗に振ってきた。三人が早苗の方を見る。

「私？ 私は...そうね。よく分からない。分からないけど、その子は、もういろんな事を決めているんだと思う。」

「決めているって？」

平山が空のグラスを手にとって尋ねた。

「ごめなさい。うまく言えないんですけど、その子は、誰とも話さないっていう方法で主張するっていうことを、全部決めちゃってると思うんです。だから、平山さんに、私たちにできることは、その主張を聞くってことだけなんだと思うんです。」

早苗はそこまで言うと、カモミールティーのカップを口に運んでごまかした。それ以上は言いたくない。三人は早苗の言葉について、各々で何か考えているようだった。沈黙が流れた後、平山が口を開いた。

「でも親としては、言いたいことがあるなら面と向かって言って欲しいなあ。時間がかかってもいいからさ。まあ、もう少し様子を見るよ。おっと、もうこんな時間か。帰らなくちゃ。今日はありがとな。わざわざ話聞いてもらってさ。」

「何言ってるんですか。そんなの全然気にしないでくださいよ。ねえ？ ラフさん。」

「はい。話を聞いてよかったです。僕たちは仲間なんですから、またいつでも話してください。」

「そうそう、仲間と言えれば平山さん。来月から新しい奴が入ってくるの聞きました？ ラフさんと同じ国の。」

「同じじゃないよ。アフガニスタンは隣の国だよ。」

「ああ、聞いている聞いている。ラフマンお前、教育係なんだって？ また大変だな。社長も自分でできないことは、受けなきゃいいのになあ。」

「そうなんすよ！ だから俺と平山さんと協力しましょうよ！ 言葉はラフさんがどうにかしてくれるとして、最初の一週間は...」

解決策なんてないの。その子は、もう決めてしまっているのよ。いくら大人たちが受け売りの言葉を口にしても、届かない。彼女は自分だけの言葉を探しているのだから。

早苗だけがまだ、話題から外れてしまった少女のことを考えている。そして少し泣きそうになった。私にはあなたの気持ちが分かる。全部じゃない。ちょっとだけ。

早苗はスルスルとテーブルを滑るラフマンのグラスの縁を、もう一度そっと押さえた。

馬鹿みたい。

「お前の好きなようにしていい。頼むから話をしよう。」

だって。私は自分の好きなようにしてるから、ここから出ないし、あんたたちの顔を見ると、吐き気がしてくるのよ。吐かれたくはないでしょう？

でも吐いたって怒りもしないんでしょうね。

「すまない。許してくれ。父さんたちが悪かったよ。どうして欲しい？ 行きたくなければ、学校なんて、行かなくたっていいんだよ。どうしたい？」

ムカつくのよ！ どうしたいって、こうしてたいに決まってんじゃない！ 何で分からないのかしら？

ベットの上に座って、すっかり湿気ってしまったポテトチップスをポリポリと齧ってみる。またあいつらが寝静まったら、コンビニに行かなきゃ。レオンは今日、来るのかしら？ こないだ会った時は、コーラばかり飲み過ぎて、気持ち悪い。とか言ってたけど、だいたい本当にあいつ、学校に行っていないのかしら？ 腕なんか真っ黒に日焼けしてたし、「自宅用の日サロがあるんだよ、家にも。深夜の通販で買ったんだ」というのも、ちょっと言い訳っぽい。私の肌は、どんどん白くなる一方なのに。まあいいわ。あいつに会ったら、また色々買ってもらわなきゃ。

レオンは少し前から、真夜中のコンビニで、ちょくちょく会うようになった男の子。歳は同じくらいだろうか。聞いていない。

「俺のこと、レオンと呼んでよ。君のことは何て呼べばいい？」

「教えない。」

レオンも学校に行っていない。どのくらい行っていないの？ と聞いたら「200光年くらい。」と言って笑ってた。「光年」は距離の単位なのよ、馬鹿。

真夜中の街には、二種類の間人しかいない。「誰にも相手にされない馬鹿」と「馬鹿としか付き合えない馬鹿」私は前者で、レオンは後者。でもお互い「馬鹿」とってここだけは共有してるから、そういう意味では、レオンは「友達」とってことになるのかしら？ 「友達」だって。うげえー。タモさんじゃあるまいし。「友達の輪」とか気色悪いし。大体、二人だけで「輪」なんて作ったら、騎馬戦の、下で支えてる二人みたいになるし。なんでレオンと騎馬戦なんかやんなきゃいけないのよ！ 上に乗る人がいない「馬」なんて本当にマヌケだわ。

親が寝静まるのを確認してから、そろりと家を抜け出す。パーカーのフードを頭にかけて、不審者気取りで『ローソン』まで歩く。おでんの匂いが、一年中するのよね。『ローソン』って。だから好きなの。

いたいた。レオンが雑誌のコーナーで、ゲーム雑誌を立ち読みしている。なんだかムカついたから、思い切りお尻を蹴ってやる。

「おい、ネクラ！ 雑誌は買って読めよ！」

「おーう、来たな。今日あたり来ると踏んでたよ。ちょっと待って、ここだけ読ませて。」

「お前はストーカーか。なんで私が来ることを『踏む』んだよ！ 気持ち悪い。ねえ、ポテチ買っ

てよ。」

「分かった分かった。分かったから、ちょっと待ってよーう。」

ゲームの攻略を全部雑誌に載せちゃったら、ゲーム会社が怒っちゃうでしょう？ 大概そういう雑誌には、「ヒント」しか書かれてないの。知らないの？ それも踏まえて「ゲーム」になってんのかな。戦略よ、戦略。おバカなレオン。まんまとそれに、ハマっちゃってさ。

「ねえねえ、すごい事を思いついたんだけど、聞いてくれる？」

一つはここで食べて、一つは部屋に持って帰ろう。レオンはなんであんなにお金持ってんだろ？ 家がお金持ちだから？ 私の家なんて、年中お金がなくて、あいつらピーピー言ってるのに、なんてまあ世の中は不公平ね。

この時間なら、お巡りさんも回ってこない。コンビニの前で、こうやって堂々と深夜徘徊。

「君と僕でね、会社を作るっていうのはどうだろう？」

「あんた何言い出してんの？ 会社ってなによ？ 大体何を売るのよ？」

「それはさあ、これから考えるとしてさ。とりあえず作るんだよ。そうすりゃ集まる名目が、とりあえずできるじゃない。で、夜な夜な二人でこうやってコンビニの前で、会議を開くわけさ。普通の人は、真夜中に働かないから、僕らには競合相手も少ない。チャンスだら！」

何よ「チャンスだら！」って、全然言えてないじゃない。そんなんじゃ、チャンスの方から逃げて行くわよ。まったく何を言い出すかと思えば、会社を作る？ どうしてそんなこと考えつくのよ。

「でも僕たち、学校に行っていないから、きっと相手になんか、されないかな？ 会社って、大学出た人しか、作っちゃいけなかったりして。そうだったら残念だなー。僕、絶対大学なんて行けないし、その前に高校にも行けてないし、どこにも行かないまま、死ぬような気がするんだよね。」

「そうかもね」

「何だよーう！ ポテチ買ってやったろー？ 少しは慰めたり、励ましたりしてくれてもいいじゃない！ そうやって人は支え合うんだって、ナディーは言ってたぞーう！」

ナディーはゲームの中の、あんたの女神様でしょ？ ロールプレイングゲームみたいに、死んだって何度もやり直しがきけば、私だってナディーの言葉を信じたっていいわ。

でもそんなわけないじゃない？ 死んだら終わり。支え合って、なすり合って死んでいくなら、こうやって夜に潜っていた方ずっといい。

「そうだ！ 会社の名前は、『株式会社ナディー』にしようか？ 君が社長でいいからさ。

ね？」

何でそんな会社の社長にならないといけないのよ？ あんた、株式会社っていうものの仕組み、分かってんの？ 出資者が必要なのよ？ 信用を得て、お金をたくさん出してくれるパトロンを探さないといけないのよ？ 学校行ってない二人が、真夜中の『ローソン』の前でやってる会社になんか、一体誰がお金を出すのよ。『ローソン』にだって訴えられるわよ。そのうち。

「君が社長ってことは、君が...ナディーだ。なんてねー。たはは。それはそうとさ、君はもう本当に行かないの？ 学校。僕はさ、馬鹿だから行かないって言っても、周りが、はい、そうですか。で済む部分があるからいいんだけどさ。君は違う。君は頭いいし、優しいし、かわいいし。『いし』って

何回言ったかな？ まあいいや。」

「余計なお世話よ。」

本当に余計なお世話よ。なんでそんなこと言うのよ、レオン？ 私はあんたという時だけ、こんなに話せるの。ここが私の場所じゃないなんて、なんでそんなこと言うのよ？ だったら、代わりの場所を見つけてきてよ。ここで待ってるから！ でも、さっきの会社の話以外でよ。

「もうすぐ夜が明けちゃうね。僕らの時間は、あまりにも短い。昼間の奴らは、僕らの倍は時間を持ってるんだ。不公平だね。大学出ただけで、昼間に生きれるだけで、時間を倍も貰えるなんて、そんな不公平なゲームがあるもんか。」

ゲームね。確かにゲームなのかもね。レオン、あんたはナディーに慰めてもらいなさい。優しく。

「そろそろ帰るわ。あの人たちが起きてきちゃう」

「ん？ ああ、分かった。じゃあまたここで会おう。会社さえ作れたら、定期的に君と会えるのになあ。」

「そうね、考えとくわ。ポテチありがと。」

また会いましょう。レオン。でももしかしたら、もう二度と会わないかもしれないわね、レオン。どっちでもいいわ。今は。まずい、夜が明ける。早く隠れなきゃ。あの人たちから。全部から。レオン、バイバイ。私の友達。

信号が変わり、スクランブル交差点には、闇雲に人々がなだれ込んでくる。ラフマンも後ろから押し出されるようにして、交差点の中に放りだされた。これだけの人が交差していくのに、誰とも触れ合わないというのはまるで奇跡だ。人々は器用にお互いの距離を保ちながら、各々の目的地へと歩いて行く。家を出た時からラフマンは、自分がいつもより遅いペースで歩いていることには気付いていた。会社までの道のりを、まるで一步一步に言い訳をつけるように歩いている。

ミゲルに会う準備をする時間は、十分にあった。しかしラフマンは、何一つ準備が出来ていなかった。明日考えよう。また明日考えようを繰り返しているうちに、二ヶ月が過ぎてしまった。

今日、会社にととうミゲルがやって来る。社長から一昨日連絡があって、それを告げられた。朝一で彼を連れて来ると言っていたので、もう事務所にはいるはずだ。これからのことも話し合わないといけないから、少し早めに会社に来てくれ。と社長には言われていたが、すでにいつも出社する時間をオーバーしている。どうしても、足が前に向かっていかない。

早苗にも、結局ミゲルのことを打ち明けることができなかった。教育係のことは話してあるが、知り合いだということは伏せたままだ。どうして言い出せなかったのか、ラフマンには分からない。あるいは怖いのかもしれない。そういう考えは、確かにある。彼を見て思い出す記憶の中に、何が詰まっているのかを把握できていないことが、自分は怖いのかもしれない。それによって、早苗と築いてきたものが失われるのかもしれないと、ラフマンは、やはりどこかで考えていた。

すれ違う人々は、皆が揃ってつまらなそうな顔をしている。恋人同士でさえも、そう見える。日本人の顔は、誰もが生まれつきそう見えるのかもしれない。もしかしたら、日本人になった自分も、そんな顔をして歩いているのかもしれないと思って、ラフマンはデパートのショーウィンドウに映った顔を、思わず覗き込んだ。しかしそこに映ったのは、輪郭の見てとれない、黒い半透明の影だけだった。

気が付くと、いつの間にか会社のビルの前に着いていた。朝早い仕事があったので、ラフマンより先に家を出た早苗は、もう働いているはずだ。階段を上り、エレベーターのボタンを押す。いつもと同じエレベーターのはずなのに、ドアの開く音も、壁の色も、まったく違って見える。

不意になぜか、ラフマンは平山の娘のことを考えた。平山は普段、あまり自分のことを話しながらないのに、あの日、娘のことになると堰が切れたように話し続けた。それほど娘を愛しているし、悩んでいるのだろう。一年以上も籠りきりの少女の部屋は、きっとこのエレベーターの中のように、狭くて埃だけに違いない。ラフマンは想像する。しかし彼女の部屋には、行き先ボタンがない。彼女は一人ぼっちで、どこへも行けない。

幸いにもこのエレベーターには行き先ボタンがついている。ラフマンは心を決める。どうとでもなれ。後はなるようにしかならないさ。「5」と書かれた丸いボタンを押すと、扉が閉まり、ラフマンの体がエレベーターに持ち上げられていった。

「遅かったわね。奥で社長が待ってるわよ。例の人と一緒にいるみたいよ。」

エレベーターから出てきたラフマンを見るなり、早苗がそう言った。「ああ」とだけ答えてラフマ

ンは、真っ直ぐに「社長室」の方へと歩いていった。ドアの上半分の、半透明のガラス越しに部屋の中を覗くと、ソファに腰掛けている二人の影が見えた。しかしモザイクがかかったようにぼやけた輪郭だけでは、どちらがミゲルかを確認することが出来ない。少し間を置いて、二回ノックする。

「入ってくれ」と、社長の声。ラフマンは「社長室」のドアを開いた。

こちらを向く形で座っていたのは社長だった。その正面に、ラフマンに背中を向けて男が一人座っていた。ドアが開いても振り向こうとしない。本当にミゲルだろうか？ 短く刈り込んだ髪には、薄らと白髪が混じって見えた。大きな耳が二つ、ドアが開く音を聞いている。あいつは、こんな大きな耳をしていたっけ？ ラフマンはその耳に見覚えがない。いや、分からない。

「遅かったな。早く来いって言ってただらう？ まあいい。彼が例の新人だ。アブドゥル・ミゲル君だ。日本語も少しだけ話せるらしい。ミゲル君、こいつが君の面倒を見てくれる、ラフマンだ。不慣れなことも多くて大変だとは思いますが、分からないことは何でもこの...」

背中を向けて座っていた男は、ラフマンの名前を聞くや否や、立ち上がって振り向いた。目と目が合う。間違いない。「砂漠の虎」アブドゥル・ミゲルが目の前に立っている。

「ラフマン？ 本当にラフマンか？ これは夢か？ どうしてお前が日本にいるんだ？」

何年ぶりに聞くパシュトゥーン語だろうか。

「ミゲル。お前も本物みたいだな。お前とまた会えるなんて、思ってもいなかったよ。まさかこの日本で、お前に会えるなんてな。」

ラフマンはそう言って驚いた。もう、とうに忘れたと思っていたパシュトゥーン語が、口をついて出てきたからだ。二人はしばらく、何も言えず、見つめ合っていた。飯田もまた、何が起こったのか、全く分からず呆然と二人を見ている。

突然、ミゲルはラフマンに近寄ると、強く肩を抱いた。

「ラフマン！ 荒野の黒豹！」

そう言ってラフマンの背中を、何度も何度も叩いた。

「ミゲル...お前は...車はどうした。あのジープは、もう手放しちまったのか？」

聞きたいことは、山ほどあるのに。車のことなんかどうでもいいのに。

「ああ。あれは軍の車だった。お前には嘘ついて、自分の車だって言っちゃったが。」

ミゲルはラフマンの肩を抱いたままそう答えた。ラフマンも恐る恐る肩を抱き返す。

「そうか...。ナディーは？ あの時、付き合ってたろう？ 彼女は怎么样了？ 国に置いてきちまったのか？」

なぜだろう。それも本当に聞きたいことじゃない。

「ナディーは...」

ミゲルはそこまで口にすると、ラフマンから身を離し、急に黙ってしまった。彼の顔から表情が消えた。そして両手で顔を覆うと、床に座り込み、何の予告もなく泣き始めた。最初は小さな声を上げ、嗚咽し、やがて子供のように大きな声を上げながら、ミゲルは泣き続けた。ラフマンは動けない。どうすることもできず、立ち竦むことしかできない。

ふと見ると、社長の隣で早苗がラフマンを見ていた。その目が「どうしたの？」とラフマンに不安そうに問いかけている。ラフマンは何も答えることができない。

要町のビルの一室で、秋もそろそろ顔を出し始めようとしている晴れた日に、「砂漠の虎」アブドゥル・ミゲルはいつまでも泣き止まなかった。虎の泣き声だけが、部屋の中に響き渡っていた。

国境を越える前に、ミゲルはもう一度だけ振り返ると、自分が通ってきた道を眺めた。五年間ずっと、訓練で流し続けた血と汗が、大地に染み込み、蒸発して、遠くに蜃気楼を作り出している。長い時間をここで過ごした。しかし自分はアフガン人だ。帰るべき場所はどこではない。ミゲルはその場に跪き、アラーに祈りを捧げた。これから始まるであろう闘いに祈り、これまで過ごしてきたこの国のために祈った。

結局、ラフマンと再会することは出来なかった。しかしそんなことは今はもう、どうでもいい。ボクシングに傾けていた情熱は、消えたのではない。違う方向に向けられているだけだ。祖国を開放し、取り戻すという使命に、ラフマンの心は沸々と燃え上がり、奮起していた。そして、ナディー。君に会える。ずいぶんと待たせてしまったが、君への気持ちはこの五年間、一度も揺らいだことはなかった。神が遣わしてくれた伴侶。俺はなんて幸せ者なんだろう！ 子供も持とう。多ければ多いほどいい。そして新しい時代を繋いでいこう。

ミゲルは立ち上がると、膝に着いた砂を払い、歩き始めた。鍛え上げ、鋼のような筋肉の付いた脚が、一步一步砂を蹴っていく。ゲートが開いて国境を越えた後は、二度とミゲルは後ろを振り返らなかつた。

街へ入ったミゲルは、一直線にナディーの家を目指した。ラシールから、国境を越えたらすぐに自分の元へ来いとこの命令を受けていたが、命令より大事なことだってある。五年間も耐えてきたのだ。それ位許されてもいいはずだ。ミゲルは瓦礫の山を乗り越えながら、懐に入れてある、小さな箱が無事かどうかを確かめた。ダイヤモンドではない。水晶でもない。小さくて安っぽいガラス玉のついた指輪だったが、パキスタンに出入りしていた密輸業者の男に頼み込んで、大急ぎで手に入れた。裏に名前を入れる暇もなかったが、これで十分だ。

五年前は、街を我が物顔で歩いていたソ連軍も、今はどこにもその姿は見えない。もしかしたら、もう闘いは勝利した後なのかもしれない。そうだとしたら残念だ。その中心に、自分も参加していたかった。しかしどうということだろう？ ロシア人の姿もないが、街の人々の姿も見えないじゃないか。市場は閉鎖されたままだったし、この瓦礫の山だって、前より大きくなっているような気もしないでもない。それに、街中に漂うこの暗鬱な空気。これは何なんだろう？ ミゲルは不思議に思った。しかし、その答えが出る前に、ナディーの家の前に着いてしまった。指輪の入った箱を取り出し、中身を確認すると、大きく深呼吸した。家のドアを叩こうとして、やめる。

「ナディー、ただいま。俺と結婚してくれ。」

「待たせたな！ ナディー！ これからはずっと一緒だ！」

ミゲルは言葉を探したが、なかなかその中のどれかを選ぶことができない。ええい、感じるままを言葉にすればいいさ。ミゲルはそう決めて、ドアを叩いた。

しばらくの沈黙があって、ドアを開けて出てきたのは、ナディーの父親だった。そういえば父親のことをすっかり忘れてた。まさか父親が出てくるなんて、思ってもいなかった。

「あ...あの、ミゲルです。覚えていますか？ お久しぶりです。」

「...ミゲル？ あのアブドゥル・ミゲルか？」

ナディーの父親は、ミゲルが知っている彼とは、まるで別人のように見えた。痩せ細り、相手を威圧するような鋭い眼光も、すっかり消え失せていた。

「そうです。あのミゲルです。実は今日は、お願いがあって来ました。ナディーのことです。私たちは五年前から、結婚の約束をしていました。長いこと待たせてしまいましたが、今日、その約束を果たしたいんです。彼女との結婚をお許し下さい。お父さん。私たちは強い絆でつながっています。必ず彼女を幸せにすると約束します。だからお願いです！　どうかナディーと、結婚させてください！」

父親は何も言わず、しばらくミゲルを見ていた。本当に別人のようになってしまった。何がこうも彼を変えてしまったのだろうか？　すると突然、父親は両手で顔を覆い、声を出さずに泣き始めた。

「どうしたんです？　お父さん？　何があったんですか？　ナディーは、ナディーはどこです？」

「娘は...ナディーは、死んだんだよ！　あの娘はもういないんだ！」

ミゲルの手に握られていた、指輪の入った箱が、握り潰されていく。

「死んだ？　いつ？　どうして？」

「一年前だ。あの娘は殺されたんだよ！　あいつらに！　ああ、どうしてあんな惨いことを！」

「あいつら？　あいつらって誰なんですか！　ロシア人の奴らですか？」

父親は顔から両手を離すと、聞き取れないくらい小さな声で、何か言葉を口にした。

「なんですって？　誰なんですか！」

語気を強めたミゲルに、父親は、今度はやっと聞こえるくらいの声で言った。

「タリバンだ。あいつらが娘を殺したんだ。」

「え？」

タリバン？　タリバン！　どうして？

「ミゲル！　お前はどこへ行ってたのだ！　どうして側にいて、娘を守ってやらなかった！　あの娘はお前のことをずっと待っていた。あの人が帰ってくるまで、私も闘い続ける。そうあの娘は、言い続けていたんだぞ！　なのにお前は、今までどこに行っていた！」

そう言うと、ナディーの父親はその場で泣き崩れてしまった。かける言葉などあるはずもない。ナディーはもういない。ナディーは、もういないのだ。

瓦礫まみれの道を、何も考えられずにミゲルは引き返している。父親の話では、ナディーは何度も、ミゲルに手紙を出そうとしたそうだ。軍は、おそらくラシールは、その全てをミゲルの元へは届けずに、破り捨ててしまったに違いない。返事が来ないのを、おかしいと感じたナディーは、軍のところに行って、直訴までしたらしい。そのうちにナディーはこの国に発生しはじめた「タリバン」という存在に気付き、その歪んだイスラム原理主義に、強い反発を感じるようになった。集会を開き、女の権利を確保しようと呼ぶ彼女は、要注意人物としてマークされてしまった。一年前、不法に集会を開いたとして逮捕され、反抗をやめない彼女を、彼らは「処分」した。表向きは、戦闘に巻き込まれたことにされた。

「彼ら」ではない。「俺」だ。俺はナディーを守ることもできなかった。それどころか、知らないうちに、彼女を殺した奴らの一員になっていた。しかも俺は、五年間もそのことに気付かなかった。

ナディーを殺すための訓練を、必死になって受けてきた訳だ。なぜだ？ なぜ！

ミゲルは道の真ん中に四つん這いになり、止めどなく流れる涙を、地面に落とした。握りつぶした小さな箱が転がり、中からガラス玉の指輪が飛び出した。ミゲルはそれを拾おうともしない。ポタポタと落ちる涙が、地面に吸い込まれては消えていく。それが蒸発して蜃気楼になったとしても、そこにさえ、ナディーはもういない。

二週間が過ぎた。

ミゲルは慣れない日本での暮らしに苦勞しながらも、なんとか仕事を覚えようと必死のようだった。あの日、事務所で泣き崩れたことなど忘れたかのように、毎日仕事に明け暮れていた。あの日以来ずっと、飯田はミゲルのことをひどく心配していたが、ラフマンは少し時間が経てば大丈夫だろうと答えておいた。

しかし実際は、ラフマンにもミゲルが考えていることが、何も分からなかった。表面的には、彼は明るく振る舞い、平山や本田とも少しずつではあるが、拙い日本語でコミュニケーションを取るようになった。「いい人たちばかりで、助かったよ。何とかやって行けそうだ。」ミゲルはそう言って笑ったが、心の奥に、何か大きな傷を隠しているのが、ラフマンには分かった。あれから二人は、故郷の話は一切口にしていない。それどころか、二人を繋いでいた、ボクシングの話さえしていなかった。

「ラフさん、何か大変だったらしいじゃないですか？ 早苗さんから聞きましたよ。あいつ大丈夫っすかね？ まあ仕事は真面目にやってるからいいんですが、何か俺にできることがあったら言ってください。」

「ありがとう。大丈夫だよ。心配ない。少し時間が必要なんだ。今はそっとしておいてあげてよ。」

本田がラフマンを心配して、声をかけてくれた。ミゲルとは極力同じ仕事に同行するようにしていたが、どうしても無理な時は、本田がミゲルの面倒を見てくれていた。

「しかし驚きましたよ。あいつもボクサーだったんですって？ しかもラフさんのライバルだったなんてね。まさかこうやって日本で再会するなんてね。人生何があるか分からないですよー。」

本田はそう言って、「飯田商店」と左肩に刺繍されたジャンパーを羽織った。日が短くなり、街を歩く人々の服の色が、暖色に変わりはじめている。ラフマンが日本に来て、十六回目の秋だった。その刺繍を見るといつも、季節が変わったんだと、ラフマンは感じる。

あの日の夜、ミゲルのことを全部早苗に話した。その昔彼は「砂漠の虎」と呼ばれ、最強のボクサーだったこと。自分も「荒野の黒豹」という名前をつけられていたことも、初めて彼女に話した。理由は分からないが、婚約者を失い、そしてまた、理由は分からないが日本に流れ着いたのだと。早苗はラフマンの話を聞いて、ずっと黙っていた。あるいは、怒っていたのかもしれない。ラフマンはそう思う。彼女が怒る気持ちも何となく分かった。あれから普通に話はしているが、早苗との距離が、ほんの少しだけ開いてしまったように感じる。その隙間に、冷たくなり始めた秋の風が吹き込んで、ヒューヒューと音を立てているのが分かった。

「しかしラフさん、あれ、どうにかなりませんか？ ほら、決まった時間に祈るやつ。宗教はいいんですがね、あいつ仕事中でも欠かさないでしょう？ 今はまだ支障が出てないからいいけど、現場でクソ忙しい時に抜けられたらたまりませんよ。」

「ああ、サラート（礼拝）のことかい？ あれはイスラムでは欠かせないんだよ。でも君の言う通り、いつか支障が出ると思うから、どうしても無理な時はやめてくれって言うておくよ。」

「助かりますよ。でもラフさんはその、何でしたっけ？」

「サラート。」

「サラートってやつはしてないじゃないですか？ ラフさんだってイスラム教徒なんですよ？ だから別に強制じゃないんだって思ってたんすよ、俺。」

「僕は...もう違うんだ。信仰は持ってない。だから祈ることはもうないんだ。」

「え？ ああ、そうだったんですか。なんかすいません、変なこと聞いちゃって。そうなんだ。てっきりあっちの人って、みんな熱心なイスラム教なんだと思ってましたよ。なるほど。考えてみたらキリスト教徒だっているんだよな、きっと。」

ラフマンの周りに、キリスト教徒がいたかどうかは知らない。もしかしたら、どこかにいたのかも知れないが、イスラム教を捨ててしまった自分には、ましてや他の宗教なんかには全く興味を持てなかった。

それよりも、本田の「あっちの人」という言葉に、ラフマンは少しだけ傷ついていた。本田に悪意なんてないのは分かっている。日本人からしてみれば、パキスタンも、アフガニスタンも、ウズベキスタンも「あっちの国」なのだ。イスラムという大きくはあるが、大まかな括りの中で、フワフワと国のイメージが浮かんでいるだけなのだ。そこから弾き出された自分は、一体どこにいるんだろう？

ラフマンは思わず考えてしまう。ミゲルだって気づいているはずだ。一緒にいても祈らない自分のことを、彼は無言のうちに責めているような気がする。

「とにかくミゲルには言っておくよ。ありがとう。」

そう言って、本田と別れた。

ミゲルは会社の近くにある、小さなアパートに住んでいる。社長が苦勞して見つけてきてくれた部屋だった。社長にも早苗に話したように、ミゲルのことは説明したのだが、いつもならボクシングのことを知ったら放っておかないはずの社長も、何も言わなかった。どうすればいいのか、分からないのだろう。無理もない。ラフマンは仕事終わりのその足で、ミゲルの家に行こうかと思ったが、どうしても足が向かない。昨日、夜勤をこなした後なので、ミゲルは今、家にいるはずだった。諦めて、ラフマンは家の方角に向かって歩き始めた。しかしすぐにまた、早苗とのことを思い出して、立ち止まってしまった。彼女に今思っていることを、全部説明できたら、どんなに楽だろう。せめて「分からない」ということだけでも伝えられたら。

その場に立ち尽くしたまま、ラフマンは前にも後ろにも進めない。自分は一体、どこの誰なんだろう？ どうしてこんなところに立っているんだろう？ ラフマンと周りを囲む者達との間にできた、浅くはあるけれども、致命的にも思える溝の中にまで、吹き溜まるように秋の空気が容赦なく流れ込んできた。

早苗の夢

早苗は明け方の浅い夢の中にいる。どこかの遊園地の観覧車に、早苗は一人で乗っている、一瞬そこは、以前ラフマンと行った「花やしき」ではないのかと早苗は思ったが、そういえば、あそこには観覧車はなかったわ。と、おぼつかない夢の思考で思い直した。

もしかしたら、父さんが生きていた頃に、私を連れて来てくれた場所なのかもしれない。確信はないが、なんとなくそう思った。お父さん。お父さんの顔は、どんな顔だったっけ？ 死んでしまったお父さん。私を捨てたお母さんを愛した、お父さん。

早苗を乗せたゴンドラは、時折ギシギシと、金属と金属がこすれ合う音をたてながら、ゆっくりと周回を繰り返している。観覧車が一番下にさしかかっても、そこには誰の姿もなく、降りろとも言われないので、さっきから、もう何度も、てっぺんを目指してゴンドラは昇っていく。深い霧が観覧車の周りを包んでいて、視界はほとんど無いに等しい。窓にはなぜか、外側から鍵がかけられていて、開けることはできなかった。早苗は外の空気に触れたいと思ったが、かかっている鍵は「絶対に開きません」と一目見ただけで分かるような頑丈な南京錠だったので、早苗は仕方なく諦めた。恐らく外には、緩い湿り気を帯びた空気が漂っているのだろう。その深い霧を見ていると、例え触れなくても、それが簡単に予想できた。

さっきから早苗は、自分の一つ前のゴンドラに乗っている人影が、気になって仕方がない。霧でよくは見えないのだが、どうやら小さな女の子が、一人でそこにいるらしい。早苗に背を向けるように、早苗と同じ向きで座るその少女の髪は、遠くからでも分かるほど、艶やかに黒く、定規で引いた線のように、真っ直ぐと背中にかかっている。一瞬早苗は、その子は平山の娘なんじゃないかと思った。しかし現実世界でも彼女を見たことがない早苗には、それを確かめる術は何もなかった。

ところでやはり、ここはどこなんだろう？

さすがに早苗は、不安に思えてくる。乗り込んだ覚えもないが、かといって降りることもできない。このまま私は、この観覧車の中で、死ぬまで同じところを回り続けるのかしら？ そう思って席を立とうとするが、やはり早苗はまだ動くことができない。

ふと、もう一度、一つ前のゴンドラに目を向ける。するといつの間にか、その少女は座る位置を移動し、早苗と向かい合わせになっている。少女は、真っ直ぐに早苗を見つめているのが分かる。相変わらず濃い霧が晴れないので、顔の全てを見ることはできなかったが、その目は早苗を捉えているのだけは、感じるができる。一体誰なんだろう？ 早苗も必死になって、少女の瞳を捉えようとするが、なかなかうまくいかない。

その時、ちょうど、早苗の乗ったゴンドラが、観覧車のてっぺんにさしかかった。するとどうだろう。観覧車を包んでいた濃い霧がたちまち晴れて、視界が急に拓けてきた。遠くに太陽がポツンと浮かんでいて、その手前には輪を帯びた、小さな星がいくつも並んでいるのが見える。そして、太陽とその星たちは、細い糸のようなもので一つずつ繋がっている。全体を見ると、それはとても複雑な、唐草模様のように見える。

光景に目を奪われていた早苗は、少女のことを思い出して、もう一度前のゴンドラに視線を戻す。霧で見えなかった少女の姿を、早苗はやっと見る事ができた。

そこにいたのは、「自分」だった。歳はだいぶ若いのが、間違いない。父が死に、母に捨てられ、大人たちの都合だけで、傷つけられた頃の早苗が、 Gondola の中から、じっとこちらを見ていた。

さっきまでは、どうしても見たかったのに、早苗はその姿を見るや否や、急に怖くなった。少女の早苗には、瞳がなかった。こっちを見ている二つの目の中は真っ黒で、それは早苗を責めているように見えた。微動だにせず、真っ直ぐに、自分自身に見つめられている。早苗はますます怖くなって、座ってもいられなくなった。狭い Gondola の中で、籠の中のモルモットのように、動き回って、引っ掻き回して、必死に出口を探している。気がつくや、さっきから観覧車は、ピクリとも動いていない。軋む金属音もしなくなっている。回転のなくなった観覧車のでっぺんで、早苗の Gondola だけが、ブラブラと不格好に揺れて助けを求めている。

「助けて！ ラフマン！ 助けて！」

早苗は必死になってそう叫んだが、観覧車が動き出す気配はどこにもない。怖くてもう一度、前をみることもできない。助けて。助けて！

早苗は目を覚ます。あるいは、その時に大声を上げたのかもしれない。叫んだ声の最後の方の残響だけを、早苗は耳にしたような気がする。ベッドから起き上がり、隣で背中を向けて寝ているラフマンを見た。起きているのか、眠っているのかは、背中を見ただけでは判断することができないが、やはり起きてはいないのだろう。早苗は枕元にあるデジタル時計に目を向けた。

「4 : 40」

点滅を続けるその小さな時計は、あと一時間程で、最初のアラームを鳴らすことになっている。時計もやはりまだ、眠りの中にいる。背中をツーっと、冷たい汗が滑り落ちたのが分かった。早苗はベッドをそっと抜け出して、着替えを取りに、クローゼットに向かった。

ベットに戻っても、さっきの夢が、頭から離れない。もはやもう一度眠ることなど不可能だ。あの観覧車にいた幼い自分は、確かに私を責めていた。どうして？ どうして私は、責められないといけないの？ あなたに恥じないように、強く生きてきたわ。弱さを売りにして、人の同情を買うことなんて一度だってしたことはない。そんな私をどうしてあなたは責めるの？ 早苗は、仄かに怒りの混じった哀しみを感じ、ベットの中で思わず泣いてしまった。泣いたのは、いつ以来だろう？

このままラフマンを起こして、抱いてもらおうかしら？ だが早苗は思い留まった。ラフマンは、相変わらずこちらに背中を向けたまま、深い眠りの中にいる。早苗はそっと、その背中に手を置いた。起こさないくらいに、そっと。盛り上がった筋肉が、彼の眠りに合わせて呼吸しているのが分かる。その背中はとても大きく、早苗一人くらいなら完全に隠れてしまえそうだった。「荒野の黒豹」若い頃にそう呼ばれていたんだと、ラフマンは言った。早苗はボクシングのことなんて、何も知らない。ラフマンがボクサーだったことは知っているが、彼が人と殴り合う様子を想像したこともない。

私はこれまで日本人としてしか、ラフマンを見ようとしていなかった。「パキスタンにいた時のことを、うまく思い出すことができないんです。」あの日、浅草の喫茶店で、ラフマンは私にそう言った。そうなんだ。って私は答えたけど、蓄積された記憶が消えることなんてないのよ。私はそのことに薄々気づいていながら、日本人でない部分の彼から、目を背けてきたのかもしれない。早苗はますます涙が止まらなくなった。ラフマンが起きないように、声を殺しながら、早苗は泣き続けた。

あのミゲルという人が現れてから、ラフマンは過去の自分を、取り戻し始めている。言葉にこそしないが、私には分かる。それは私の知らない彼。私が知ろうともしなかった本当の彼。そうか、私は怖いのだ。彼が変わってしまって、彼が自分を取り戻して、私から離れて行くかもしれないと思って、私は怖がっているのだ。

ラフマンが、小さく声を上げ、体勢を整えた。しかしまだ、こちらに背中を向けたままだ。こっちを向く素振りさえ見せない。

「こっちを見て。ラフマン。お願い、こっちを見てよ。」

早苗は声には出さずに、そう言った。しかし黒豹の背中では、規則正しい呼吸に合わせて、小さく膨らんだり、縮んだりを繰り返すだけだった。

こっちを見て。早苗はラフマンにそう言い続けた。

ラシールには思惑があった。

軍の中で羨望の眼差しを受けていた、アドゥル・ミゲルという男を、英雄に仕立て上げれば、タリバンが内部にも外部にも、確固たる支持を得るための、いい宣伝になると考えていた。例え長い時間がかかったとしても、その見返りは余りあるものだろう。そう考えて、ミゲルを国外に派遣した。内政の見えない、遠くの土地で訓練を受けさせる必要があった。洗脳を施すには、まず虎を孤立させればいいのだ。

五年という長い月日を費やしてきた。ソ連軍を追い出すだけでは、タリバンが中央政府を牛耳るには不十分だった。古いイスラムの教えが根強く蔓延っているこの国では、新しい原理主義をいくら強く謳っても、受け入れられるはずはない。強い力と金を得て、力で押さえ込むしかないのだ。そのため長い時間を費やしてきた。そしてやっと、時が来た。私の理想が現実になる日がやって来たのだ。ラシールは、以前ミゲルを呼び出した同じ部屋の中で、椅子に深く腰を降ろしたまま、一人ほくそ笑んだ。

ドアをノックする音がする。「入れ」とラシールが威圧するような声で言うと、男が一人、部屋の中に入って来た。ミゲルだ。

「よく戻ってきたな！ チャンピオン！ どうだ？ 生まれた国に戻った気分は？ いや、新しい国に戻った気分は？」

ラシールはミゲルを見ると、立ち上がって両手を広げ、迎え入れる仕草をした。ミゲルは、何も言わず、その場に立ってラシールを見つめている。

「お前は神の戦士として、明日から戦いに赴かなければならない。お前の部隊も用意してある。部下はお前を神のように敬い、命令には絶対服従するだろう。どうだ？ 悪くあるまい？」

「大佐。一つ質問があります。」

ミゲルが抑揚のない声で、そう言った。

「何だ？ いいだろう。なんでも聞こうじゃないか。」

「ナディーという名前に、聞き覚えはありませんか？」

ラシールは知っていた。ナディーという女を。ミゲルの婚約者であったことも。自分の元に何度も現れては、しつこくミゲルの居場所を教えて欲しいと、繰り返して訴えていた。居場所が教えられないのなら、せめて手紙を届けて欲しいと。その度に、適当に聞いて追い払っていたが、あの女は諦めず、しまいには我々の組織自体を、激しく糾弾し始めた。集会を開き、世界中に向けて声を発信しようとしていた。これだからインテリ女は、たちが悪いのだ。

「ナディーか。聞いたことがあるぞ。確か平和集会の最中に爆撃を受けて死んだ、リーダーの名前がそれだったと思うが？」

「爆撃？ 嘘だ！ 大佐、あなたは嘘をついている！ ナディーはあなたが殺したんだ！ 父親がそう言っているんだ。どうして、どうしてそんなことをしたんだ！ 答えろ！」

ミゲルはそう叫ぶと、腰から小銃を抜き、ラシールに狙いを定めた。銃を持つ手は、怒りで震えている。

「愚かな。どうして私とその女を殺さないといけないのだ？ お前はその女と特別な関係にあったのだな？ そうなんだな？ それならば、尚更私が殺す理由はないはずだ。なぜ同じ神の戦士の伴侶を、殺さねばならんのだ！」

「しかし、しかし父親が…」

「その父親は娘が死ぬところを見たのか？ 本当にそうだったと言い切れるのか？ お前は何も分かっていない。ソ連軍が攻撃してきた時に、それに反撃して、集会を守ろうとしたのは、我々タリバンなんだぞ！ それを何だ！ お前は、身内を殺戮者呼ばわりか？ どうした、ミゲル！ しっかりしろ！」

「…本当に、そうなのですか？ ソ連軍が彼女を？」

「当たり前ではないか！ あの連中の冷酷さを、お前も今まで散々見てきただろう？ 全部あいつらの仕業だ。お前の愛する女を奪ったのも、この国を土足で荒らし回ったのも、全部あいつらだ！ さあ、銃を下ろせ、ミゲル。今ならまだお前の非礼も許そう。さあ！」

ミゲルは震える手をゆっくりと下ろすと、銃を床に投げ捨てた。するとラシールはそれを拾い上げ、再びミゲルの手に持たせた。

「銃を捨てるとは何だ！ 神の戦士は最後まで銃を捨てずに戦い続ける。そう教わってきただろう？ さあ、ミゲル。銃を取れ！」

ミゲルはラシールから銃を受け取ると、それを額に押し当てて、声を上げて泣き始めた。全く大したチャンピオンだよ。こんな弱い男が本当に使い物になるのだろうか？ まあいい。多少の誤差も心地良いものだ。

「お前の辛い気持ちはよく分かる。だが悲しんでいる暇はないのだ、ミゲル。分かるな？」

さあ、もう泣くな。帰って少し休むのだ。いいな？」

ミゲルは何も言わずに頷くと、銃を腰にしまい、うなだれた格好でそのまま部屋を去って行った。あいつが駄目なら違う奴を使うまでだ。女が死んだくらいで泣くような奴は、戦いには向かないかもしれない。「砂漠の虎」が聞いて呆れる。しかし父親が知っていたとは迂闊だった。手を打たねばなるまい。誰一人として、私の邪魔をする者は許さない。こんなところで、終わってなるものか。こんなところで！ ラシールはデスクの上に置かれた小さな地球儀をクルクルと回すと、ソ連を指で狙った。しかし指が止まった場所は、タリバンを影で支援し続けてきたアメリカの、東海岸にある小さな島だった。

さらに二週間が過ぎた。

早苗とは、依然ギクシャクしている。本田は自分のバンド活動が忙しくなってきたようで、あまり仕事に出ていない。平山の娘は、相変わらず部屋に籠ったきり出てこない。

ミゲルだけが淡々と、着実に仕事をこなしていた。ラフマンは、彼に付いて仕事を教えていた。最初のうちは、日本語がおぼつかないミゲルは、パシュトゥーン語であれこれラフマンに質問していたが、最近では目を見張る勢いで日本語を習得している。

「本田サン、オンガクハ、ナニヲヒキマスカ？」

「平山サン、コレハ、ナントヨミマスカ？」

そう言って、本田や平山にも、日本語で話しかけている。大したものだ。語学に長けていたラフマンでさえ、ここまで早く日本語を覚えることはできなかった。もっともミゲルは、最初から日本語の文法の外郭を、すでにマスターしているようだった。一体彼は、どこでそれを学んだんだろう？ ラフマンには見当もつかない。しかしそれを尋ねることもできない。一ヶ月が経った今でも、二人はボクシングや国の話をしていない。暗黙の了解のように、その部分だけを避け続けていた。当然のように、ナディーの話もすることはなかった。あの時泣き崩れたミゲルは、何を思っていたのだろうか？

ラフマンの提案で、ミゲルは一日五回のサラートも、三回に減らしていた。それに関しては譲らないだろうと、ラフマンはミゲルに言う前から半ば諦めていたが、意外にも彼は二つ返事で「ワカリマシタ」と日本語で答えた。どうしてだろう。ラフマンはその時、寂しさに似た感情を覚えた。

その日は、久しぶりに仕事に出てきた本田と一緒に行動していた。当然ミゲルも一緒だ。新宿のピルの移転作業は、意外と早い時間で片付いてしまい、事務所に戻る前に、高速脇の側道に車を止めて、三人は休憩することになった。街路樹が紅葉し始め、吹く風は冷たくなってきていた。

「あーあ、やっぱり久々に働くと体が鈍っているのが分かるな。明日は絶対筋肉痛になってるよ。それはそうと、ミゲル、どう？ だいぶ仕事にも慣れた？ ラフさんが一緒にいれば安心だよな。」

「ハイ。ハジメハ、タイヘンデシタガ、ダイブナレテキマシタ。」

ミゲルがほぼ完璧な発音で、そう答えた。

「お。日本語も、もういけるんじゃない。すごいなあ。何？ あれなの？ あっちの人達ってそういうのが得意なんすか？ ラフさん？」

「そんなことないよ。彼が飛び抜けているんだ。僕だって、こんなに早く喋れるようにはならなかった。」

「ドウモアリガトウ。」

ミゲルは、ラフマンにも日本語で礼を言った。右脇を走る高速道路は、夕方のラッシュを迎えて混み始めている。中にはちらほらと、ヘッドライトを灯す車も見える。「回送」の文字を出しながら、「もう客を乗せるなんてゴメンだよ」という顔をしているタクシーの運転手。何か楽しそうにお喋りをしながら、笑い合うカップル。ラジオから流れる音楽に合わせて、リズムを取っている若い男。誰もが、各々の目的地に向かって車を走らせている。

考えてみれば、それはとても奇妙だ。ラフマンたちだけが、その流れに乗っていないからそう見え

るのかもしれないが、それにしても、これだけたくさんの人々が、それぞれ違う場所を目指せるという事実を、流れの中にいる彼らも、意識しているのだろうか？

「そういや、ミゲル。お前、ボクサーだったんだって？ ラフさんとも闘ったことがあるって話じゃん。今はもう辞めちゃったの？」

運転席に座って、タバコに火をつけた本田が、突然ミゲルにそう尋ねた。ラフマンと本田に挟まれて座っていたミゲルの動きが、一瞬止まったのが分かる。

「...ハイ。タシカニ。ボクシングヲ、シテイマシタ。デモ、モウ、ムカシノコトデス。ハルカ、ムカシ。」

そう言ったきり、ミゲルは黙り込んでしまった。沈黙が車の中に流れる。ラフマンは、言葉を見つめることができない。本田が空気を察して、口を開いた。

「そっか。悪い悪い。変なこと聞いちゃって。」

「スイマセン...。」

ミゲルが、小さな声でそう言った。

「ところでさ、今度俺、初めてワンマンライブやるんですよ！ 会場も、大きいホールなんです。これまで散々誘ってきたのに、全然ラフさん来てくれないんだもんなー。今回は、絶対に来てくださいよ。ミゲル！ お前もだぜ！ ジャパニーズソングの真髓を、見せてやるぜ！」

ミゲルは、早口で喋った本田の言葉がよく分からなかったらしく、ラフマンの方を見て説明を求めた。ラフマンは、本田の言葉を説明してやった。

「ソレハ、スゴイコト、ナンデスネ？ デモ、ボクハ、ソナトコ、イッタコトナイシ。」

「だから、ラフさんに連れて来てもらえばいいんだよ。ラフさんを誰だと思ってんだ？ 池袋在住、十六年の、バリバリの日本人だぜ？ 江戸っ子だぜ？ この日本に、知らない土地なんてないんだぜ！」

ラフマンは、その言葉の意味を半分にして、ミゲルに説明してやった。

「イヤ、デモ...」

「行こう。ミゲル。大丈夫だ。僕も行ったことはないけど、案内するよ。」

ラフマンがミゲルにそう言った。

ラフマンはきっかけが欲しかった。閉ざされた、ミゲルの心を開くための。狂ってしまった、自分の歯車を元に戻すための。きっかけが欲しかった。

「決まりだ！ そうこなくっちゃ！ ライブは来週の土曜日です。よーし！ 楽しくなってきた！

そうと決まったら、早く帰って練習しなきゃ！」

本田はそう言うと、ウインカーをつけて、車を出した。流れの中に放り込まれ、ラフマンたちを乗せた車も、目的地を持った。ミゲルは何も言わない。何を考えているのかも、分からない。

ラフマンはきっかけが欲しかった。

週末の渋谷には、光に集まる虫のように、たくさんの若者が溢れかえっている。ラフマンは、この街に来るのは初めてではないが、池袋とはまた違う人種の集まるこの街の活気が、あまり好きではなかった。しかしよく考えれば、ラフマンたちこそ、この街の「異人種」なのだ。片方は、中東系の

日本人、もう一人は、日本に来たばかりのアフガニスタン人。否が応でも人目を引いてしまう。

駅を出たラフマンとミゲルは、スクランブル交差点を、人ごみに揉みくちやにされながら、なんとか渡りきり、センター街を抜けてライブハウスに向かっている。池袋で待ち合わせて電車に乗ってから、二人はあまり口をきかなかった。時折、電車から見える建物や、ネオンに浮かぶ看板の文字を見て、ミゲルは「あれは何なんだ？ あそこには、何て書いてあるんだ？」とラフマンに尋ねた。その度に説明してやると、ミゲルは「そうか」と言って、また次の興味の対象を探そうと、電車の外を眺めていた。

ライブハウスは、ラフマンが考えていたよりもずっと大きくて、立派な所だった。入り口には、大きな看板が掛かっている。

「本日は皆様が証人！ South & North 初のワンマンライブ！」

South & North？ それが本田のバンドの名前だろうか。悪くない。ラフマンはそう思いなら、ミゲルに手招きすると、地下で受け付けを済ませるために、階段を降りた。壁には、様々なミュージシャンの写真が一面に貼られている。その中の誰一人として、ラフマンは見覚えがなかったが、それは彼らが有名でないからなのか、ラフマンが疎いだけなのかは、分からなかった。

受付の女の子は、ラフマンが自分たちの名前を言うと、顔を上げて二人を交互に眺めた。しかし何も言わずに、何枚かの紙の挟まった冊子を手渡すと「あちらです」と言って、奥の入り口を案内してくれた。冊子に挟まれた紙には、色んなバンドの、これからの活動予定が、所狭しと書かれている。ミゲルはそれを珍しそうに眺めている。

会場のドアを開けると、そこには抜けるように広い空間が広がっていた。座席はなく、集まり始めた客たちは、各々の場所を確保して、楽しそうにお喋りしている。入って正面にあるバーで、ラフマンはビールを、ミゲルは炭酸水を注文した。飲み物を出した男もまた、二人のことを珍しそうに見ていた。開演まで、まだ少し時間があつた。

「ミゲル、もう少し前に行かないか？ こう狭くちゃ、グラスを持ってるのもやっとだよ！」

「わかった。そうしよう！」

大音量で流れる音楽の隙間を縫って、二人は叫んだ。俄に人が増え始め、会場は熱気を帯びてきた。この感覚。覚えがある。そうだ。試合前もこんな感じだった。リングに向かうまでの道を通る時も、そこはこんな感じの熱気に包まれていた。ラフマンはふと思い出した。ミゲルを見る。恐らく彼も、同じ事を感じているに違いない。広い場所を求めて、ホールの中央に進むと、二階にも客が入っているのが見えた。音楽に合わせて、目の前の女の子が体を揺らしている。振り向いた彼女は、ミゲルと目が合うと、とても素敵な笑顔を見せて、ステップを踏んだ。

その時突然、ホールの照明が落ちて、歓声が上がった。目の前のステージが明るくなり、本田以外のメンバーが、舞台袖からぞろぞろと出てきた。各々の楽器を手にとると、軽く音を出して肩を回している。これから目に物見せてやるぜ。という彼らの気持ちが、ビリビリと伝わってくる。

そしてドラムのカウントで、一斉に音を出した。目の前の空気が震えているのが分かる。いつの間にかこんなに人が入ったのだろう。会場は超満員だ。演奏が始まると、歓声が一際大きくなった。ラフマンは、ホールのちょうど真ん中に押し出された。スクランブル交差点を渡った時のように、観客に

揉みくちやにされて、手に持っていたグラスは、どこかへ放り出されてしまった。さっき踊っていた女の子も、ステージに向かって「本田さーん！ 本田さーん！」と狂ったように叫び続けている。

すると、舞台袖から、ギターを抱えた本田が、バンドの中央に飛び出してきた。会場の熱気は最高潮に達した。普段とは別人のような本田が、そこに立っている。観客に両手を上げ、マイクの前に立つと、本田は叫び声を上げる。それを合図にして最初の曲が始まった。激しい、愛の歌。ラフマンは夢中になって曲に合わせて手を叩いた。ミゲルはどこにいるのだろうか？ いつの間にか、ラフマンは、ほぼ最前列に押し出され、彼と離れ離れになってしまった。今さら後ろに下がることもできない。ラフマンは諦めてステージで暴れ回る、本田の姿を追い続けた。

今まで見なかった事を後悔するくらい、本田のバンドは素晴らしかった。最後の曲を紹介する時に、本田は観客を静かにさせると、マイクに向かって言った。

「最後の曲です。この曲を、僕の素晴らしい日本人の仲間のために捧げます。聞いて下さい。L i k e b i r d s f l y」

言い終わると本田は、ラフマンの方を見た。そして親指を立てて笑った。いつか車の中で、ラフマンが譜面を見つけた曲。美しい前奏が流れ、本田の少し哀し気な声が、会場の隅から隅に響き渡った。

まるで深い河のような
淀みの中を 歩いてきたから
心の奥に 触れられると
怖くて 怖くて 作り笑いさ

まるで長い映画のように
思うすべてを 歌にしてきたけど
伝えなければ 意味などない
それくらい 僕にも分かってたよ

L i k e b i r d s f l y
君がいなければ 僕もそこにはいない
L i k e b i r d s f l y
僕がいなくても 君は飛んで行けるの？
僕は知りたい 知りたいって伝えたい
君に伝えたい

外に出ると、渋谷の街には霧のような雨が降り始めていた。しかし熱を持った顔に、雨が当たって心地良い。少し離れた場所にあるガードレールに、ミゲルが一人で座っていた。ミゲルは、ラフマンに気づくと、手を挙げて合図した。その仕草に、見覚えがあった。そうだ、1979年に、ミゲルの試合を見た後にも、そうやって彼は、リングサイドから合図を送ってたっけ。記憶が溶け出し、ラフマンの体の中に浸透していく。

「ミゲル、はぐれてすまない。ちゃんと見れたか？ よかったな。これまで売れなかったことの方が不思議だ。今度会ったらそう言ってやらなくちゃ。本当に素晴らしかった。」

ラフマンは興奮のあまり、饒舌になっている。言葉はいつの間にか、パシュトゥーン語に戻ってしまっていた。

「そうだな。すごく楽しそうに歌ってたな。言葉はやっぱり難しいけどな。」

ミゲルはそう言って静かに笑った。

駅までの道は、来た時の倍の人混みで埋めつくされていた。ラフマンとミゲルは、なかなか前に進めない。仕方ないのでラフマンは、宮下公園を抜けて、宮益坂から駅に入ることにした。

階段を登り、公園の中を歩きながら、ラフマンはまだ興奮が冷めやらない。最後の曲が特によかった。あの曲が、テレビの中から流れてくる日のことを想像したりして、胸が高鳴った。

「1979年のクリスマスを、覚えているか？」

ブランコの前を通り過ぎた時、ミゲルが急に口を開いた。

「あの試合を、ナディーも観に来るはずだった。荒野の黒豹をぶちのめすところを、どうかお前に観てもらいたって、俺が頼み込んだんだ。結局、あんなことになっちまって、試合自体ができなかった。それでも俺はずっと、お前と闘いたいと思っていたし、いつか必ず実現すると、信じてた。」

ラフマンは立ち止まり、ミゲルを見た。こんな喋り方で彼が話すのは、日本に来てから初めてだ。しかし知っている。ラフマンはこの声にも、聞き覚えがある。それはボクシングに明け暮れていた若き日の、ミゲルの声だった。

「でもナディーは、いなくなっちゃった。何かが壊れた。その後の俺は、ずっと見ないようにしてきた。ナディーが住み着いて離れない心の一部を、見ないことで、いつか彼女を忘れるかもしれないと、信じたかったんだ。でもな、さっきの歌を聞いて分かったぜ。一部だけ、やけにはっきりと言葉の意味が分かった。『君がいなければ、僕もそこにはいない』俺はもう、どこにもいないんだ。彼女を失った時に、俺も一緒に消えちゃったんだよ。今ここにいる俺は、残骸だ。あの頃、街中に散らばっていた、瓦礫とおんなじなのさ。」

ミゲルはブランコに向かって、足元の小石を蹴った。

「俺の言ってる意味が分かるか？ お前には分かるまい？ さっさと国を捨て、信仰さえも捨てたお前には、分かってたまるものか！ 愛する者を、永遠に失う悲しみも、信じた神に裏切られる絶望も、安穩と暮らしてきたお前には、想像もできないだろう？ ラフマン、俺は憎いんだ。お前が、死ぬ程に！ すべてから目を背けて、幸せでござって顔して生きてるお前がな！」

ミゲルはそう叫ぶと、ライブハウスでもらった冊子を地面に叩きつけて、駅とは反対の方向に歩き始めた。階段を降り、原宿方面にその姿が消えていくまで、ラフマンは呆然とミゲルの後ろ姿を眺めていた。冊子から飛び散った紙が、風に流されてひらひらと飛んで行った。

お父さん。

死んだその人には悪いけど、私には何も感じられないわ。そりゃあ、可哀想だとは思わよ。私だって、それくらいの心はある。でも、それを聞いて、どうしろっていうのよ？

泣けばいいの？ 同情すればいいの？ そんなことしたって、その人は帰ってこないんでしょう？

お父さん、ドアの前で泣いてたけど、私だって泣けるものなら、泣いてあげたいわよ。

レオンに会いたい。あれから一度もローソンに姿を見せないけど、どうしたのだろう？ レオンに会いたい。

パーカーのフードを頭から被って、不審者でござい。って、気分じゃないのよ。私は不審者でも...、あれ？ 不審者の反対の言葉って、何て言うんだろう？ 「不審者でも〇〇

でもない」って言おうとしたのに、言葉を知らないわ。大学出たら、そんな言葉も、スラスラスラって出てくるのかしら？ だけど、私、「スラスラスラ」が欲しいわけじゃないの。じゃあ、私は何が欲しいの...？ わかんない。わかんない。レオンと話がしたい。

いたいた。あいつ、またゲーム雑誌なんか読んでやって。他にやることないの？ でもいいわ、今日はいたから、許してあげる。『ローソン』にコソッと入って、そろりとレオンに近づく。こないだより、ずっと思いっきり、お尻を蹴ってやる。

「痛い！ ああ、なんだよー。いきなり蹴るなよー。せめて蹴る前に、一言声かけてよー。」

「先に言ったら、面白くないじゃない！ それにしても、レオンまたそんなの読んでんの？ しかも先月号じゃない。こないだも読んでたわよ。それ。」

「あれ？ そーお？ 道理でなんか、見覚えがあると思った。」

馬鹿ねー、レオン。もう一度蹴ってやりたいわ。一度と言わず、二度三度。どうして今まで現れなかったのよ！ 会社作ろうって言ったのは、あんたでしょ！

「レオン、ポテチ買ってよ。今日は罰として、三つ買って！」

「罰？ 罰ってなんだよー？ 何か僕が、悪いことしたのかよー？ わかったよ。幾つでも買えばいいだろー。」

当たり前よ！ 私を待たせたんだから、私に「会いたい」って、思わせたんだから。レオン、あんた知らないでしょ？ 私、ポテチなんて、全然好きじゃないのよ。あんたが最初に会った時、「これでも食べなよ」って、「コンソメパンチ」味を差し出してきたから、それが嬉しかったの。あんたに「ポテチ買ってよ」って言うのは、そのことを忘れないようにするためのの。

「久しぶりだよねー。なかなか僕、家を抜け出せなくてさ。深夜徘徊が親にバレちゃって、見張られてたんだ。今日は、その目をかいくぐって来たわけ。なんとなく、今日君に会えるような気がしたからさ。」

キザなこと言っちゃって。そんな意識もないんだろうけど。いけない！ お巡りさんだわ。この時間なら、大丈夫なはずなのに。

「レオン！ ほら、逃げるわよ！」

「え？ 待って、待ってよー！」

こんな所に公園があったなんて、知らなかったわ。ここなら、大通りからも、だいぶ離れてるし、お巡りさんも来ないでしょ。あら？ レオンがいない。さっきまで後ろを、ハアハア言いながらついて来てたのに。どこに消えたのかしら。

いた。あんなとこで、何してんのかしら？ 滑り台も迷惑そうだわ。あんなでかい図体で、足元をウロウロされちゃあ。ろくに寝てられないでしょうに。公園だって、きっと夜は眠るのよ。深夜徘徊の私たちなんて、相手にしてくれないのかも。それにしても、レオン！ 何やってんのよ？ 何かさっきから、地面を掘ってるみたいだけど、埋蔵金なんてないのよ。そう、東京に埋蔵金なんてないの。あんなのテレビの嘘っぱちなよ。分かってんの？ レオン！

「ねえねえ、ちょっとこっち来てよ！ 僕、いいこと思いついちゃった！」

何？ 会社の次は、何なのよ？ どれどれ？ その穴がどうしたのよ。何も出てきてないみたいだし。まったく、意味不明だわ。

「この穴にさ、僕ら二人の宝物を埋めるんだ。タイムカプセルっていうんだよ。で、十年だか、二十年だか経った後に、また二人で集まって、掘り起こすわけさ。で、超感動して、涙流しながら、抱き合うんだら！」

「だら！」って、また言えてないじゃない！ なんで大事なとこで間違えるのよ！ それに、そんな浅い穴じゃあ、一ヶ月もしないうちに、野良猫だか、野良犬だかに掘り起こされて、持ってかれちゃうのがオチよ。レオン、もっと深く掘らなきゃ。地球の中心が見えるくらい、ずーっと深く。

「なんでいきなり、そんなこと思いつくのよ！ もっと、前触れみたいなものがあったらいいんじゃないの？ 『いい公園だね、二人の思い出を作りたいね。そうだ、タイムカプセルでも埋めようか。』とか、ドラマみたいな、分かりやすい導入部分がまったくないじゃない！」

「だって、思いついちゃったんだもん。それに、君だっていつも、いきなり僕の尻を蹴るじゃないか。それとおんなじだと思うんだけど...」

「違う違う。全然違う！」

「そっかー、いい考えだと思ったんだけどなー。そうすりゃ、君が少しは元気になるんじゃないかと思ってさあ。」

「何よ。私のどこが元気ないっていうのよ？」

「だってさー、今日はなんか、いつもと違うじゃん。どこが違うのかは、大学出てないから、うまく言えないんだけど。どうかしたの？ 何かあった？ あ、もしかしてー、あの日？」

もう一度、今度は一回転の遠心力をつけて、レオンの尻めがけて、蹴りをお見舞いしようとしたけど、あいつ、そんな時だけ妙に機敏で、あっさりよけられた。

「冗談だよ、冗談。でもさ、本当に何かあったの？ よかったら、話してみたりなんかしたりして。」

憎たらしい。でも何で分かったの？ レオン？ ゲーム雑誌しか読まないあんたが、女の子の心を読むなんて、ビックリしたじゃない。

「あったけど、あんたになんか、話してやんない。」

「やっぱりあったんだ！ ほらねー、レオン様の勘をなめちゃいけねーよ。でも話せないの？ どうしても？」

「しっこいわよ！」

こうやってブランコに乗るのは、久しぶりだな。レオンはお尻が大きいいから、さっきから何度も、座る位置を直してるけど、諦めなさい。ブランコには、子供しか乗れないのよ。子供？ 私は子供なのかしら？ 「大人」でないことは確か。だからといって、それ以外が「子供」って言われるのは、間違ってると思う。

「あのさあ、レオン、一つ質問していい？」

「うあ？ うん、いいよ。なに？」

真面目な話してんだから、お尻ばかり気にしてんじゃないわよ。

「死んだら、人はどこに行くのかしら？ 死んだら、その人の体に詰め込んでた、知識とか、哀しみとか、憎しみとかは、ぜーんぶ消えちゃうのかな？ 人は苦勞して、いろんな物を手に入れるわけじゃん？ それがさ、死んだ途端に体から消えるっていうのは、ちょっと不自然じゃないかしら。」

ちょっと難しかったかな？ 聞いた私が馬鹿だったかもしんない。

「体の中にあるもの？ 君はそんな難しいこと、いつつも考えてるわけ？ すごいなー、やっぱり大
学行く人は、社長になる人は違いますなー。いよっ！ 社長！ ナディー！」

だから、社長じゃないし！ ナディーじゃないし！ やっぱり聞いた私が馬鹿だったわ。

「僕は時々思うんだ。僕が死んだら、どれだけの人が悲しんでくれるんだろって。どれだけの人が、葬式に来てくれんだろって。でもさ、その人たちに、僕は会えないんだよね。当たり前だ、死んでんだから。彷徨う幽霊になって、葬式の様子を覗きにいくのも、何だか、カッコ悪いし。でもきっと、会わなくてもいいんだ。多分さ、最初から僕たちは、なーんにも、残せてないのかもよ。苦勞しているんな物を手に入れようとしてもさ、ぜーんぶ、僕たちの体を、通過して行っちゃうんじゃない？

確かに、そんな考えは、悲しい。何も残せないなら、生きてる意味なんてない。だから信じない。信じないことを、みんなでワイワイ言い合って、安心してる。でもそこには、メリットもある。ワイワイ言い合ってるうちに、人は恋をする。恋をしたり、抱き合ったり、生理になったりしながら、新しい命が生まれたりする。そうすつとさ、例え自分の中に、何も残らなくてもさ、覚えていてもらえるだろう？ 周りの人の中には、自分が確かに残るわけさ。それって、愛だよなー。愛。今は僕たち二人、こうやって深夜徘徊しながら、ポテチ何個も買って、公園に穴掘ってしか、生きられない。でもそれも、ずっとじゃない。そう思ってる。いつか真夜中から抜け出すために、僕は君を、君は僕を、覚えているわけさ。僕らなりに、ワイワイやってる。いつか昼間に、歩けるようになるためにね。だから、もし、今君が、怖いと感じてるなら、僕も一緒に怖がるんだ。そうやって、小さく小さく、支え合う。会社だって作ったんだし、君がいなくなったら、そりゃあ寂しい。寂しいけど、いつかは部屋から出ないといけない。僕も君も。せめてそれまでは、会社は維持したいんだら！」

何よ。何なのよ、レオン！

何で泣かせるのよ。急にそんなこと言って、止まらないじゃない。何で泣かせるのよ。

「よし！ 分かった！ せっかく穴を掘ったんだ。何か埋めなきゃ、穴に失礼だよ。タイムカプセル埋めるには、ちょっと浅いかなあ。うーむ、じゃあ穴に向かって、今、一番大事な物の名前を叫ば

うよ！ んだ、んだ。そうしよう！」

大事な物の名前？ そんなの、いきなり言われても分からないわよ。

「よっし！ じゃあ僕からね。どれどれ、いきますよー。せーの。ナディー！」

何でナディーなのよ！ 何で私じゃないの？ あ、そうか、レオンは私の名前、知らないんだ。じゃあ、ナディーは私なんだ。

「ささ、お嬢さん、あなたの番ですぞ。こちらへ、こちらへ。」

バカバカしいけど、付き合ってるわ。穴に向かって叫んだことあります？ って、将来もし聞かれても。ありませんって言い張るんだから。今夜だけよ。いくわよ、レオン。

「本田さーん！」

「なんだよー！ 本田って誰だよーう！ 普通そこは、『レオン』！ って叫ぶとこだろー？ あー、もう、落ち込んじゃうよー。」

「ふふん、私は社長だから、何言っても許されるのよ。」

「ひでー社長だなー。お、まずい！ あそこの家の電気がついたよ！ 通報されたらまずい！

ナディーさん、いざ、逃げますぞ！ 『ローソン』まで！」

レオンの手って、こんなに大きかったんだ。ハアハア言っちゃって、逃げ足も早くないくせに。でもいいの。ありがとう、レオン。私、決心がついたわ。だからこのまま、あんたに引っ張られていてあげる。私たち、小さく小さく引っ張り合ってきたわね。それが間違いじゃないって、レオン、あなたが言ってくれたから。あ！ ポテチ、公園に置いてきたじゃない！ でもいいや。また買ってもらう。レオンに。二人の会社がある、あの『ローソン』で。

機関銃の音が鳴り響いている。

ただ、音と音の間隔がやけに広い。スローモーションの映画の中のように、音は現実味を帯びていない。ここはどこなんだろう？ 分からない。そもそも、景色みたいな物はどこにも見えず、鳴り響く機関銃の音だけしか見えない。音だけが見える。銃口から発せられた弾の軌道が、誰かの胸を撃ち抜く音が見える。

「本田が死んだ」と電話口で、飯田が言ったのを聞いた時、最初ラフマンは、銃で撃ち抜かれたのは、本田だったんだよ。と言われたんだと思った。しかしそうではなかった。

本田が死んだ。交通事故だった。バンドの練習から帰る途中、自転車で信号待ちをしていたところに、居眠り運転のトラックが突っ込んできた。即死だった。飯田の声が、現実の世界で、確かにラフマンにそう言った。ラフマンはベットの脇の時計を見たが、数字が見えても、それを認識に結びつけることができない。景色は見えているのに、それを理解できない。隣では早苗が目を覚まして、何かとラフマンを見ている。

「何時ですか？」

「事故か？ 昨日の夜十時くらいらしい。これから朝一の便で、ご両親が遺体を引き取りに来るらしいんだが、その前に俺のところに連絡がきた。」

「いや、そうじゃなくて、今何時なんですか？」

「朝の五時半だ。眠っているところ、すまない。俺はこれから、空港までご両親を迎えに行く。ラフマン、今日の仕事は、全部他の奴に回した。お前と、早苗ちゃんと、ミゲルの三人で、出来るだけ早く準備して、北海道に飛ぶんだ。明日の夜、通夜も済ませてしまうつもりだそう。お前たち三人が、飯田商店の代表として参列してくれ。必要な金は口座に振り込んでおく。住所は、ご両親に聞いてから連絡するから。早苗ちゃんによく葬式の作法とか聞いてな。」

「どうして僕なんですか？ ましてやミゲルまで。」

「ラフマン！ お前たちが行くことに、意味があるんだ。本田もきっとそれを望んでいるはずだ。いかに、これは社長命令だ。じゃあまた連絡するからな。」

そう言って、飯田は電話を切った。ラフマンは受話器を耳から離すことができない。早苗がそれを見て、不安そうにラフマンの膝の上に、左手を乗せた。

札幌空港に着いたのは、通夜当日の昼だった。出発が遅れたのは、休みも重なり、航空券がなかなか手に入れられなかったからだ。ラフマンは、着陸した飛行機の窓から、生まれて初めて、雪を見た。滑走路一面に広がる銀世界に、思わず目を奪われてしまう。隣に座ったミゲルは、雪に興味を持たないのか、あるいは見るのが初めてではないのか、機内に備え付けられている、通販雑誌を覗んでいる。窓側に座った早苗は、羽田を飛び立ってからずっと眠り続けている。ミゲルとの距離は、あの日以来、より一層開いてしまった。仕事の上では会話を交わしてはいたが、それ以外の話を、ミゲルがすることはなかった。あの日を境に、ミゲルはパシュトゥーン語を話さない。

本田が死んだと聞いて、ミゲルはひどく驚いて、動揺しているようだった。北海道である葬儀に、

一緒に参加してほしいとラフマンが言うと、彼はしばらく考えた後「北海道ハ、トオイノカ？」とラフマンに尋ねた。行ったことはない。ずっと北にある、寒い土地だとラフマンは答えた。空港からタクシーに乗り込み、飯田から聞いた住所を、早苗が運転手に告げた。ここから一時間くらいかかるらしい。助手席に早苗が座り、ラフマンとミゲルは、後ろの席に座った。

窓から街を見ると、そこは一面の雪に覆われている。家の玄関に出て、一生懸命雪かきをしている人々の姿を見ていると、初めて日本に来た時のことが思い出された。絶望なら知っているさ、ミゲル。それに耐えながら、一人きりで生きてきたんだ。ラフマンは、隣で同じように外を見ている男に、そう言いたかった。

「葬儀があるんですか？」

不意にタクシーの運転手が、助手席の早苗に尋ねた。日帰りで帰る予定の三人は、東京から、喪服を着て飛行機に乗り込んでいた。そんな服を持っているはずもないミゲルを、ラフマンは午前中のうちにデパートに連れて行き、飯田からもらった金で、一番安い黒のスーツとネクタイを買い、大急ぎで裾丈を合わせてもらった。三人を、運転手は一体どういう風に見ているんだろう？ きっと日本人の早苗しか、見ていないのだろう。その証拠に、さっきから運転手は、後ろのラフマンたちには目もくれない。

「もうすぐ着きますよ。でも残念ですね。来週から、雪祭りが始まるんですよ。その時いらしてたら、綺麗な街を見れたでしょうに。あ、葬式でしたね、こりゃ失礼しました。」

ラフマンは、もう一度外を見た。よく見ると、運転手の言う通り、街の至る所で祭りの準備が整えられている。「雪祭り」とはどんな祭りなんだろう？ おそらく寒さを凌ぐために、人々が集まり、熱気を作り、暖を取る。そんな祭りなのだろう。ラフマンは一人で勝手に想像した。ボクシングと同じだ。本田のライブとも同じだ。

その時タクシーが、本田の葬儀が行われている斎場に到着した。

ライブの時と同じように、そこにはたくさんの人々が集まっていた。違うところと言えば、皆が揃って、黒づくめの服を着ていることと、誰も踊ったりはしていないということくらいだ。ラフマンも、日本で葬式に参列するのは初めてだった。早苗が三人分の記帳をして、受付を済ませた。教えられた通りに焼香の列に並び、順番が来るのを待った。

式場の正面には、日本の寺の形を簡素化したような、祭壇が組まれている。その両脇には、菊の花籠がびっしり段々に並んでいて、その一つ一つに、名前の書かれた札が刺さっている。右側の一番下の段に、飯田の名前を見つけて、ラフマンは早苗に目配せして、それを知らせた。ミゲルを見た。彼には表情というものがなかった。何を考えているのか、推し量ることすらできない。

祭壇の中心には、笑っている本田の写真が飾られている。その真下には、木製の白い棺が置かれている。当たり前なことだが、その中に本田が眠っているのだろう。祭壇に向かい合わせで、紫の袈裟を着た坊さんが座り、お経を唱えている。内容までは分からないが、それが「祈り」であることは、ラフマンにも分かった。

焼香の順番が回ってきて、三人は一緒に焼香台の前に進んだ。作法は前もって早苗に聞いていたので、その通りに焼香を済ますと、右側に座っている親族に向かって頭を下げた。姿勢を戻して、親

族たちを見ると、彼らは驚いたような、あるいは少し怒ったような（気のせいだろうか？）顔をして、三人を見ていた。中にはひそひそと、隣の席の人に耳打ちをしている人もいる。誰も葬式に、アラブ人が現れるなんて、考えてもいなかったのだろう。三人はバツが悪そうに、早々に式場の外に出ようとした。

その時、親族席に座っていた、和服の女性が立ち上がり、三人に深々と頭を下げた。左胸には、黒地のリボンがつけられていて、「喪主」と書かれているのが見えた。恐らく、本田の母親だろう。ラフマンは思った。しかし会話を交わす間もなく、案内の者に急かされて、三人は外に出された。

お清めの席で、三人は部屋の端っこに、他の人たちから離れてポツンと座っている。ミゲルも早苗も、一言も口をきかない。そういえば、この二人は東京を出た時から、お互いに全く会話をしていない。しかしその二人と同じくらいの距離が、ラフマンと早苗との間にもあると、今は感じている。ミゲルがラフマンと早苗のグラスに、すっかりぬるくなってしまった瓶ビールを、無言で注いだ。帰りの飛行機は最終便だったので、まだ少し時間がある。

「飯田商店の皆さんですね？」

気がつくのと、式を終えて、お清めの席に挨拶に来た本田の母親が、三人の席の側に立っていた。早苗が先に立ち上がると、ラフマンとミゲルに、立つように促す仕草をした。二人も立ち上がり、本田の母親に頭を下げた。

「俊雄が東京で、お世話になってたみたいですね。今日はわざわざ、ありがとうございます。」

そう言って母親は、もう一度頭を下げた。

俊雄？ 本田の名前は俊雄というのか。ラフマンはその時初めて、彼の名前を知った。

「なんだかね、まだ実感がないんです。皆さんが、それはそれは温かい言葉で、励まして下さるんですけど、あまりにも急なことですね。私たちも、まだうまく受け入れることができないんです。」

本田の母親は、よく見ると本田にそっくりだった。表情を崩した時にできる、目元の皺など、瓜二つだった。

「ええと、間違っていたらごめんなさい。あなたが、ラフマンさん？ それで、あなたは早苗さん？ そしてそちらが、ミゲルさんかしら？」

母親は三人の名前を、一人一人正確に言い当てた。

「あの子はよく、電話で言っていたわ。仕事はキツくて大変だけど、先輩の中にパキスタンから日本にやってきて、働いてる人がいるんだって。会社の女の子と結婚して、日本人になったけど、本当は故郷を恋しく思ってる。でもそれを人には見せず、奥さんだけを愛し、遙か遠いこの日本で、強く生きてるんだって。音楽でなかなか売れなくて、正直、不安な毎日だけど、もし音楽がだめだったら、飯田商店のその仲間たちと働いていくのも、悪くないと思ってるって。」

そこまで言うと、母親は声を詰まらせた。

「ごめんなさい。それとね、最後にあの子が電話を掛けてきた時に言ったの。ミゲルっていう新人が入ってきた。ラフマンと同じ国の出身で、二人は昔、ライバルだったんだって。ボクサーだったんだ。母さん凄いなと思わないか？ 長い時間を経ても、運命の糸は切れてなかったんだ。それはとても素晴らしいことだ。二人をライブに誘ったんだ。一緒に観にきてくれるんだ。俺は、いつか二人がまた対戦してくれないかなって、密かに願ってるんだよって。でもその前に、俺が売れて、いなくな

「つちまうかもな。って...そう言って笑ってたわ。」

母親はそれ以上話を続けることはできなかった。

本田、本田、馬鹿だな。アフガニスタンは隣の国だって言ったじゃないか。ラフマンは涙を止めることができない。早苗もまた、ハンカチを目に当てて、泣いていた。ミゲルだけが、俯いて本田の母親が履いている足袋の辺りを、じっと見ている。

空港へ向かうタクシーの中で、来た時と同じように、三人は各々の視線を、窓の外に向けている。斎場を後にする三人を見送ってくれた本田の母親は、車が見えなくなるまで、深々と頭を下げていた。だんだんと小さくなる母親の姿を、ラフマンも早苗も、ミゲルも見つめていた。その時やっとラフマンは、本田が死んだんだと分かった。

帰りのタクシーの運転手も、雪祭りの話をした。この街はその時期、本当に綺麗なんですよ。と何度も強調する彼の言葉を聞いて、ラフマンは、雪祭りを見てみたくなった。

「1979年のクリスマス覚えてるか？」

車内に突然、ミゲルのパシュトゥーン語が響いた。運転手が、話を途中でやめて、バックミラーで、後ろの二人を見た。

「ラフマン。まだ間に合うかもしれないな。約束を果たそうじゃないか。俺とお前は、どのみち闘う運命なんだよ。そこから逃げ出すことは、俺もお前もできないんだ。闘うしか道はない。俺たちはボクサーだろう？ そうだろう？ ラフマン、来年のクリスマスだ。その日に決着をつけよう、荒野の黒豹。俺は、お前にもう一度、決闘を申し込む！」

そう叫んで、ミゲルは真っ直ぐラフマンを見た。虎の瞳がラフマンの眼を捉えて離さない。

「分かった。分かったよ、ミゲル。お前の申し出を受けよう。勘違いするなよ。お前のためじゃない。俺自身のためだ。お前を倒して、俺は全てを取り戻す！」

ラフマンはそう答えた。タクシーの運転手が、まだちらちらとバックミラーで後ろを窺っている。気がつくと、助手席に座っていた早苗が振り返って、不安そうな顔で二人を見ていた。

「お前、本気で言ってるのか？」

飯田が「社長室」のソファーに座ったままの格好でそう言った。

「はい。もちろんです。」

「早苗ちゃんは何て言ってるんだ？」

「早苗はもう分かっているはずですよ。話はしないとイケないですが。」

告別式も無事に終わり、本田は生まれた街の火葬場で灰になった。もう東京には二度と戻らない。いつか本田は言っていたっけ。

「東京が人を締め出していく」

その言葉を字でいくように、彼は行ってしまった。それだけでは飽き足らず、青磁でできた、小さな骨壺の中に収まってしまった。ラフマンは悔しかった。そして憎かった。本田を締め出した、東京というこの街が。彼の歌を奪ったこの街が。そして胸の奥底から湧き上がる、このどうしようもない熱情を、どこかに向けて、吐き出したかった。きっとミゲルも同じように感じていたのだ。だからこそあいつは俺に「決闘」を申し込んだに違いない。それは嬉しくもあった。ミゲルと俺は、共にあの頃の、闘いに飢えていた、あの頃の自分たちに戻りつつあったのだ。

飯田に、来年のクリスマスに、ミゲルと試合をしたい。トレーニングができるジムを、紹介して欲しい。できれば、ミゲルとは別のジムがいい。そしてその試合ができる場所も、用意して欲しい。何もプロのリングでなくてもいい。客なんて、いなくたっていい。四角に区切られた場所があれば、それでいい。そして、その試合のレフリーを、社長に引き受けて欲しい。仕事に支障はきたさないと、固く約束する。ラフマンは、飯田にそう嘆願した。飯田は腕組みをしながら、目を閉じている。やがてゆっくりと目を開けて、ラフマンを見た。

「分かった。俺だってボクサーだったんだ。お前たちの気持ちも、分からなくはない。こみ上げる物を、抑えきれない感情がなくなったらそこで終わりだ。グローブを付ける資格はない。羨ましいよ。そこまでお互いを高め合える相手がいるお前らがな。いいだろう。お前の言う通りにしよう。ただし、仕事に影響が出ていると俺が判断したら、この話は無しだ。いいな？」

ラフマンは、何度も飯田に頭を下げた。

帰りがけに、エレベーターを登ってきた平山と、ちょうど鉢合わせになった。これから夜勤に入るのだろう。

「ラフマン。本田のこと、残念だった。本当にいい奴だったのに。お前は大丈夫か？」

「はい、俺は大丈夫です。ありがとう。平山さんはどうなんですか？ 娘さんは相変わらずですか？」

「ああ、まだ部屋に籠ったままだ。だがな、昨日、ドアの前から話しかけたんだよ。本田の話をしてやった。あいつがいつか言ってた通り、俺はちょっと甘過ぎたのかもしれない。だから昨日は娘に、恥ずかしくないか？ って言ったんだ。夢半ばで消えていく、若い魂に対して、そうやって籠ってるだけのお前は恥ずかしくないのかって。それが正しい言葉だったかどうかは、分からないよ。でも本心だったよ。」

「そうですか。思うままを伝えたなら、それでいいんだと、俺は思います。」

平山と入れ違いで、ラフマンはエレベーターに乗り込み、一階のボタンを押した。その時、事務所に入りかけた平山が、ラフマンを呼び止めた。

「ラフマンお前今、自分のこと、『俺』って言ってたよな？ どうした？ タフガイにイメージチェンジか？ まあいいけどな。なんとなくそっちの方が、雰囲気にあってるぜ。『僕』よりもな。じゃあ、お疲れ。」

平山にそう言われるまで、全く気がつかなかった。しかしラフマンは、タフガイなんかになりたいんじゃない。本当の自分になりたいだけだ。一足先に帰った早苗を『ジョナサン』で待たせている。少し話がしたいんだと、帰りがけに言っておいた。何をどう話したらいいのかは、よく分からない。でも思うままを話そう。平山が、娘に語りかけたように。

『ジョナサン』のいつもの席で、早苗はラフマンを待っている。話があるというのは、ミゲルとものに違いない。ラフマンは、ボクシングをまた始める気なのだ。そして、ミゲルと、もう一度闘う気にいるのだろう。なんとなくそれが分かる。ラフマンが店に入ってきた。こっちを見た。近付いてくるラフマンは、早苗が知っている彼とは、全く別人のように見えた。

「待たせてごめん、早苗。何か食べなくてもいいの？」

「うん、大丈夫。あなたは？」

「うん、俺もまだいいかな。」

俺？ 俺って何よ？ 今まで一度だって、自分のことそんな風に呼んだこと、なかったくせに。

「早苗。話があるって言ったけど、薄々は分かってるんだらう？ ミゲルとあの時話したんだ。来年のクリスマスに試合をするんだ。そのためのトレーニングの場を探して欲しいって、社長に頼んできたよ。なかなか君に言い出せなかったのは、悪かったと思う。でも分かって欲しい。俺もミゲルも、そこから逃げることは、できないんだ。大丈夫。仕事はちゃんとするし、家のことも、君の負担を増やしたりはしない。体を作り直すには、時間が足りないかもしれないけど、やるしかないんだ。」

どうしてだろう？ 私は嫉妬している。とても激しく。ミゲルに？ ボクシングに？

分からない。

「そうだと思ってたわ。本田君の葬式よりも前から、あなたは、あの人と闘いたくてウズウズしてたもの。でも私には何も話してくれなかったわね。私が反対すると思ったから？ ボクシングなんて知らない私に、説明なんて必要ないと思ったから？ 私には何もできないと思ったから？」

「違う。違うよ、早苗。俺にもよく分からなかったんだ。自分自身が。うまく言葉にすることが、できなかっただけなんだ。」

「でも、あの人には、ちゃんと言えてたじゃない！ 車の中ではっきりと。自分の言葉で！ ラフマン、あなた日本人でしょ？ どうしてあの時、私にも分かる様に、日本語で話してくれなかったの？ 私にも...私にも伝えて欲しかった。あの時に。」

本当は止められないことだって、分かっている。ラフマンは、いくら早苗が止めたところで、ミゲルとの闘いを止めたりはしないだろう。ただ、私は側にいたかったの。あなたが、私の知らないあなたになったとしても、そこに私も、含まれていたい。

「ごめん。早苗。約束するよ。決着をつけたら、元通りになる。俺はこれまでも、これからも日本人だ。」

ラフマンはそう言って早苗の手を握った。早苗の目から、涙がこぼれた。私はただ、何もできなくてもいい。離れることなく、この人に寄り添っていたいだけなんだ。信じてみよう。信じるに値する人なのだから。早苗はそう覚悟した。

「一つだけ、約束して。」

「何だい？」

「試合の時、セコンドは私にやらせて。必要な技術は勉強するから。」

「セコンドなんて言葉、よく知ってたね。」

ラフマンが驚いてそう言った。

「馬鹿にしないでよね。私だって色々調べたんだから。」

ラフマンが握っていた手を片方だけ離すと、優しく早苗の頭を撫でた。

「あと、もう一つだけ。」

「何だい？」

「次の休みに、花屋敷に連れて行って。」

また階段を飛び降りて、案内してよ早苗って言って。手を繋いで、私が案内するから。早苗は、心の中でそう続けた。

前夜。

この日のために、身体を鍛え直した。飯田は二人に、別々のジムを紹介してくれた。仕事を、ミゲルと一緒にこなしながら、帰りには別々のジムに直行する毎日だった。

しかし、十六年のブランクを埋めるには、余りにも時間が足りなかった。筋肉は悲鳴を上げ、走る度に、心臓が激しく脈を打った。それでも耐えられたのは、早苗がいてくれたからだ。彼女がいなかったら、俺はとっくに「やめよう」と言っていただろう。

ミゲルがどんなトレーニングをしてきたかは知らない。でも日に日に、彼の身体は引き締まり、ふくらはぎには、鋼のような筋肉を纏っている。一緒に働いていて、それが分かった。それは明らかに、労働だけではつかない筋肉だ。虎は、本来の姿を取り戻しつつある。俺は？ 俺はあの頃のように、黒豹のように、駆けることができるだろうか？ やれるだけのことはやった。あとは明日の試合に臨むだけだ。

飯田は、持ち得る全てのコネクションを駆使して、二人に試合の場を提供してくれた。話を聞きつけた、飯田の知り合いのブローカーが、大々的に興行を打とうと持ちかけてきた。どんなプロの試合よりも、二人の試合には、客が集まるはずだと言われた。考えてみればそれも頷ける。

「十七年振りに再戦を果たす、パキスタンの黒豹と、アフガニスタンの虎」

誰でも興味が湧く。「あっちの国」の人たちが、何か面白いことをしているんだとでも思っているのだろう。勝手にしやがれ！

試合は、都内の大きな公園の一角にあるコロシウムに、リングを組んで行なわれる事になった。チケットが出回り、それはほぼ完売してしまったと聞いた。でも、そんなことはどうでもいい。俺はミゲルと決着をつけたいだけなんだ。周りで騒ぎたい奴は、騒げばいいさ。誰も二人の間に入ることはできない。明日だ。明日、倒してやるぜ、ミゲル。今度こそお前をぶちのめす！

ラフマンは祈りを捧げた。アラーの神、日本の神、両方に。ラフマンは、日本に来て初めて、神に祈った。

控え室用に立てられたテントの中で、ミゲルは一人、ベンチに座っている。外から時折わーっと歓声上がる。話に乗ってきたプロレス団体が、ミゲルたちの試合の前に、前座を務めている。向こうサイドに立てられた、同じテントには、ラフマンがいる。

まさかこの日本で、あいつと闘うことになるとは、夢にも思っていなかった。運命というのは、正にこのことを言うんだな。もうすぐ入場だというのに、バンテージがうまく巻けない。前はそんなこと、一度もなかったのに。

「ミゲル。すごい客が入ってるぜ。俺、まさかこんなに人が来るとは、思ってなかったよ。参ったなあ。」

「ソウデスネ。オドロキマシタ。平山サン。キョウハ、アリガトウ。」

セコンドには、平山がついてくれることになった。しかし彼は、ほとんど素人同然なので、側についてできることは、あまりないだろう。それでもミゲルはありがたかった。二人の個人的な因縁だけのために、周りの日本人はこんなにも協力してくれる。しかし誰よりも、この闘いのきっかけを与えてくれた本田に、ミゲルは感謝して、祈った。

「そろそろお願いします！」

プロレス団体の一人が、テントに入ってきてそう言った。やっとの事でバンテージを巻き終わると、平山がグローブを着けてくれた。10オンス。久しぶりに感じるこの重み。腕が上がらなくなるまで打ち続けるだけだ。

テントを出たミゲルは、大歓声に迎えられる。師走の冷たい風が、ミゲルの体を舐めていったが、不思議と寒さは感じない。どこからこんなに集まったのか、観衆は五百、いや、もっといる。彼らが吐く白い息で、会場はもやがかかっているように見える。誰が呼んだのかテレビカメラまで入っている。ミゲルは中央のリングを見た。反対側からは、ラフマンが入場してくるのも見える。シューズの踵を地面に慣らし、リングへ向かった。

「只今より！ 有限会社飯田商店主催によります、中近東暫定王者決定戦を行います！ ルールは国際マッチに則り行いますが、階級が違う二人のこの闘いは、あくまでも、非公式です。10回戦を終えても決着のつかない場合は、ジャッジ不在のため、引き分けとなります！ また、この試合の実現のために、尽力くださった関係各位の皆様には、この場を借りて深く...」

ミゲルはラフマンを見た。彼はコーナーの方に向いて、セコンドについた早苗と何か話している。マイクを持って、進行をしているのは飯田だ。「サスペンダーと蝶ネクタイはこの日のために新調したんだぜ」と言っていた。

「それではお待たせしました！ 選手の紹介をします！ 青コーナー！ 145ポンド、荒野の黒豹！ ハミール・ラフマン！」

歓声が起こる。ラフマンがリングの中央に進み、それに応える。

「赤コーナー！ 155ポンド、砂漠の虎！ アブドゥル・ミゲル！」

ミゲルも軽く右手を挙げる。

飯田が二人を中央に集めて、ルールの説明をしている間、二人は目を合わさない。コーナーに戻り、ミゲルはもう一度祈りを捧げる。ナディー、観てるかい？ 君がここにいたらどんなに心強いかな。俺は勝つよ。必ず勝つ。

「ミゲル！ ほら啞えろ！ 頑張れよ！」

平山が、マウスピースをミゲルの口に入れた。歓声がより一際大きくなり、コロシウムが熱気に包まれていく。時間だ。ゴングが鳴り響いた。

第1R

再び中央に歩み寄り、ミゲルとグローブを合わせた。最後に戦った時のことはよく覚えてるぜ。お前は、得意の右フックが打ちたくて仕方がないんだろ？ そうはさせない。俺は黒豹だ。捕まりはしないさ。

ダッキングを繰り返しながら、左を打つタイミングを伺う。ミゲルが先に手を出した。しかし本気ではない。明らかに威嚇だ。ラフマンは少し距離をとり、左右のウェービングを速くする。そして一気に距離を縮めると、ミゲルのリバーめがけて二発打ち込む。「ウグッ」という低い呻き声が聞こえたが、ミゲルは怯まない。それどころか、射程に入ったラフマンを、上からはたき倒そうと、右を打ち下ろしてきた。ガードした左手のグローブの下に痛みが走り、痺れるのが分かる。

まずい。ラフマンはたまらず、ミゲルに体を預ける。「ブレイク！ ブレイク！」飯田が二人に割って入る。再び距離をとったラフマンの左手には、まだ痺れが残っている。

思い出した。虎の右を。迂闊に近づけない。打っては引き、チャンスを伺う。ミゲルは前に出てこない。様子を見て、一気に畳み掛ける気だ。そこでゴングが鳴った。

第2R

トレーニングをしてきたとはいえ、恐らく10R闘える体力は、お互いにないだらう。ミゲルはそう踏んでいる。早いラウンドで勝負をつけたい。

しかし黒豹の脚は健在だった。なかなか自分のペースに持ち込めない。打ち返す時にはもう、ラフマンの姿が視界から消えている。ミゲルは焦り始めていた。

いや、何を恐れているんだ。こいつを捕まえるために、俺はノコノコと生き抜いてきたんだらう？ 前に出なくてどうする！ 恐れるな！ ミゲルは自分にそう言い聞かせ、グローブを顎の位置に置くと、一直線にコーナーのラフマン目がけて前へ出た。ラフマンのパンチが、顔、腹、顔と打ち込まれる。それでもミゲルは止まらない。とうとうラフマンをロープ際に追い込んだ。

ミゲルは両足を開くと、左右の逃げ道を塞ぐ。チャンスだ！ 左右のボディが、ラフマンの腹にめり込む。たまらず身体が「く」の字になって、顎の位置が下がる。ミゲルは渾身の力で、右アッパーを放つ。しかしもう一歩のところまで、ラフマンは体勢を立て直し、ミゲルのパンチをよけた。ゴングが鳴った。

一進一退の攻防が続いた。観客は二人のパンチが命中する度に、大きな歓声を上げた。コーナーに戻ってきたラフマンは、もう体力の限界だった。早苗が水を飲ませる。

「早苗！ 今何Rだ？」

「次が8Rよ！ ラフマン！ 大丈夫？ もういい。もういいわ！ もう十分闘ったじゃない！」

早苗の声は、大歓声に掻き消されてしまった。ラフマンの右の頬が切れ、血が頬に垂れている。早苗はタオルを手に取り、それを拭き取った。

「畜生！ あの野郎！ 何で倒れないんだよ！ パンチはこっちの方が当たってるのに！ 畜生、ミゲル、殺してやる！ 殺してやるよ！」

青コーナーでは平山がミゲルの背中に氷を当てている。ミゲルもまた、とっくに限界を越えていた。

「ミゲル！ おい！ 聞こえるか？ まだいけそうか？ 止めるなら、いつでもいいんだぞ！」

「止めるな！ 止めたら殺す！ あいつだって、限界はきているはずなんだ。なのに脚がまだ死んでない！ 俺のパンチはそんなにヤワだったのか？ 違う。あいつが強いんだ。ラフマン、ラフマン！

最高だ、最高だよ！ お前は！」

ミゲルがパシュトゥーン語で叫ぶ。平山に意味が分かるはずもない。

再びゴングが鳴った。

第8R

ラフマンにはもう、リングを駆ける力は残っていない。目の前に飛んできたパンチをよけて、ガードが下がったところに、反撃を繰り返すだけだ。

でもな、ミゲル。お前の必勝パターンは知ってる。左、左、右だ。最後の右アッパーに、カウンターを被せる。どうした、虎！ 打って来いよ！ そんなもんじゃないだろう？ お前だけ不幸を背負ってきたみたいな顔しやがって。苦しいのはお前だけじゃないんだ！ 俺だってこの国で必死に生きてきたんだ。お前は、ただ内に籠っていじけてるだけの、ネクラ野郎じゃねえか！ 解放してやる。

俺がお前を解放してやるよ！ だから、打って来いよ！

ミゲルが力を振り絞って前に出た。左、左、そして右アッパー。ここだ！ ラフマンは降り抜かれた虎の右手に合わせて、強くにぎった右手を顔面に叩き込んだ。

吹き飛ばされたミゲルが、大の字になってリングに倒れた。観客が雄叫びを上げる。

「ダウン！ コーナーに下がって！ 1、2、3…」

カウントが進む。ミゲルはロープを掴みながら、カウント8で立ち上がって、ファイティングポーズをとった。飯田がミゲルの目を見る。続行だ。

そんな！ 手応えはあった。芯の入ったパンチが確実に命中したのに！ ラフマンはロープ際で動けない。ゴングが鳴った。

第9R

狙われていた。俺の右アッパーを、完全にあいつは狙ってやがった！ 畜生！ でも同じ手は二度と喰わない。ダウンを取られたがまだ腕は上がる。ラフマンのスピードは確実に落ちている。捕まえるのは今しかない！

ミゲルはもはや、立っているのがやっとのラフマンに近づくと、ガードもお構いなしに左を繰り返した。少しずつ、ラフマンのガードが開いていく。一つフェイクを入れて、顔面を狙った右の軌道を変える。それがラフマンの脇腹に突き刺さった。

悶絶の顔を浮かべ、左肘が下がる。ガラ空きになった左の頬に、ミゲルは右ストレートをぶち込んだ。血飛沫が床に飛び散る。ヨロヨロとよろけてロープに捕まったラフマンが、その場で座り込む。

「ダウン！」飯田が今度は、ラフマンのカウントをとっていく。しかし、ギリギリのところラフマンは立ち上がり、ファイティングポーズをとった。飯田の肩越しに、ラフマンがミゲルを睨みつけている。「殺してやる」とその目が言っている。ゴングが鳴った。

試合は最終ラウンドにもつれ込んだ。二人はコーナーに座って、お互いを睨み合っている。ダウンはお互い一回ずつだ。しかしジャッジはいない。倒れるか、倒されるかだ。上等だよ。望むところだ。昔からそうやって勝ち抜いてきたんだ。ミゲルとラフマンの名前を、観客が交互に叫んでいる。最後のゴングが鳴った。

最終R

ミゲルの両目は腫れ上がり、もはや視界は、ほとんどないに等しい。懸命にラフマンを捉えようと、グローブで目をこする。するとミゲルの目の前に、軍服を着た男が現れた。

ラシールだ。大佐！ 俺はあんたから命令されるのは、もううんざりなんだよ！ あんたが、タリバンが、ナディーを殺したんだろう？ 本当はそうなんだろう？ おれは分かっているながら、全てから逃げた。あんたに復讐する勇気すらなかった。でも今やっとそのチャンスが巡って来た。目の前のその男のおかげでな。死ね！ 大佐！ 死んで罪を償ってこい！ ナディー！ 許してくれ！

ミゲルがもはや、子供にもよけられそうなスピードのパンチを、ラシールの幻影に向かって打った。しかしそれは、虚しく空を切り、ラシールには到底届かなかった。幻影の中から、ラフマンのグローブが突き出てくる。ミゲルはギリギリのところ、それをガードする。死ね！ 死ね！ 虎は泣いていた。こぼれた涙でミゲルの視界は、一層狭くなった。

ラフマンもまた、完全に脚が止まってしまった。もはや、立っているのがやっただ。ミゲル。お前と闘うことは、もう二度とないだろう。今日のことは永久に俺の胸に刻まれ、死ぬまで忘れない。勝ち負けなど、もうどうでもいい。早苗、早苗！ 君を愛している！

見たか？ これが本当の俺の姿だ！ 俺は取り戻したぞ！

最後の力を振り絞り、脚を前に出し、虎の懐に飛び込んでいく。黒豹もまた、泣いていた。声にならない、うねり声を上げながら、黒豹は泣いていた。

ガードも何もない。持てる力を全て使って二人は殴り合い、泣いている。

ゴングが高らかに鳴った。最終ラウンドを終えても、二人の決着はつかなかった。二人は床に膝をつき、泣きじゃくりながら、強く抱き合った。

「ミゲル！ 俺は、俺は取り戻したぞ！ お前のことも、取り戻したぞ！」

「ラフマン！ 俺もだ！ 決着はついた。やっと俺たちは！」

早苗が泣きながら、ラフマンの背中に抱きついてきた。平山もリングに入り、ミゲルの肩を叩いた。

平山の側に、高校生くらいの少女が、所在なさげに立っている。真っ黒な長い髪を一つに縛って、透き通るような白い肌をしている。平山が、目で早苗に合図をした。早苗は駆け寄って、少女を強く抱き締めた。「よく来たわ、よく来たわね！」少女は何も言わなかったが、それを拒むことなく、小さく早苗を抱き返した。

飯田がラフマンとミゲルの手を取り、リングの中央に導くと、二本の腕を高々と持ち上げた。観客の拍手は、師走の空に鳴り響いて、いつまでも止むことはなかった。

成田空港のロビーは、出発を待つ客と、それを見送る人々でごった返している。ミゲルが乗る便は、あと十五分ほどで、搭乗手続きが締め切られるようだ。さっきからミゲルもラフマンも、口を閉じたままだ。二人の顔には、試合の傷跡がまだ消えずに残り、それを見た人々は皆、驚いた顔をしながら目の前を通り過ぎて行った。

早苗もまた、何も言わない。この二人はもう十分言葉を交わしたのだ。十七年分の会話を、リングの上で。早苗はまだ少しだけ、それに嫉妬していた。

社長は何度も引き留めたが、ミゲルの意思は固かった。試合の礼を言い、飯田の元を訪れた彼は、アフガニスタンに戻るつもりだと社長に言った。早苗もちょうど事務所にいて、それを聞いていた。早苗には、何となく分かっていた。彼が国に帰るという決断をすることが、はっきりではないが、おぼろげに。

ラフマンもまた、分かっていたのだと思う。ミゲルが飯田商店を辞めて、国に帰ることを知っても、彼は何も言わなかった。

「ソロソロイクヨ。ココデダイジョウブ。」

「ああ。ミゲル、もしまた日本に来たら、もう一度闘うか？」

「モウニドト、イヤダ。」

二人はそう言って笑った。日本語で冗談を言い合う、傷だらけの二人のアラブ人は、周りから見ていて、明らかに奇妙だ。

本当は二人には分かっているんだろう。もう二度と会うことはない。ミゲルが日本に来ることもない。ミゲルは荷物を肩に背負うと、「ソレジャア、イクヨ」と行って歩き始めた。しかし何か思い出したのか、立ち止まり振り返ると、早苗の方に近づいた。

「サナエサン。アリガトウ。ドウカ、コドモヲ、コドモヲ、モツテクダサイ。シアワセニナツテクダ

サイ。」

早苗はミゲルを抱き締め「ありがとう」と言った。ミゲルには分かっていたのだろうか？ あの時、平山の娘を抱き寄せた時から、早苗がラフマンと子供を作ろうと、心に決めていたことを。

ミゲルはもう一度ラフマンと抱き合うと、エスカレーターに乗り、搭乗口の方へと消えていった。「砂漠の虎」アブドゥル・ミゲルはもう戻らない。しかし、早苗もラフマンも、心は晴れやかだった。

「早苗、帰ろうか。僕たちの家に。」

「ええ、帰りましょう。黒豹さん。」

ラフマンは笑ったが、顔の傷が痛むのか、その声は引きつっている。

家に帰ろう。そして幸せになろう。

早苗は、ラフマンの手を取ると、空港の出口に向かって歩き始めた。出口の先には、いつか二人で行った「花屋敷」があるかもしれない。早苗はふと、そう思った。